青森県埋蔵文化財調査報告書　第649集

郷山前村元遺跡Ⅱ

－常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

２０２５年３月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和５年度に常海橋銀線道路改築事業予定地内に所在する郷山前村元遺跡の発掘調査を実施しました。

郷山前村元遺跡は、梵珠山の南東に位置する青森市浪岡に所在します。青森市浪岡には数多くの埋蔵文化財包蔵地が遺されていますが、その中には史跡高屋敷館遺跡をはじめ平安時代の重要な集落遺跡が少なからず含まれます。

調査の結果、縄文時代の土坑及び平安時代の竪穴建物跡、円形周溝などの遺構や、同時期の土器などの遺物が発見され、本遺跡が平安時代の集落跡であることが分かりました。

出土遺物の中でも特に、底面に「大」の字が刻書された土師器坏は、極めて希少な出土例として、大変学術的価値の高い資料です。

本報告書は、令和５年度の郷山前村元遺跡発掘調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対して御理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただきました青森市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

令和７年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所　長　　渡　部　泰　雄

例　言・凡　例

1　本書は、青森県県土整備部道路課（以下、事業者）による常海橋銀線道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和５年度に発掘調査を実施した青森市郷山前村元遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査の対象面積は1,800㎡、発掘面積は1,670㎡である。

2　郷山前村元遺跡の所在地は青森県青森市浪岡大字郷山前字村元地内、青森県遺跡番号は201398である。

3　郷山前村元遺跡の発掘調査報告書は、同事業に伴い、既に１冊刊行されており、本書は第２冊目である。

4　発掘調査と整理・報告書作成の経費は、事業者が負担した。

5　発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	令和５年５月９日～同年７月28日
整理・報告書作成期間	令和６年４月１日～令和７年３月31日

6　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が刊行した。執筆と編集は平山明寿文化財保護主幹が担当した。依頼原稿については、文頭に執筆者を記した。

7　発掘調査から整理・報告書作成に当たり、以下の業務については委託により実施した。

基準点設置測量	株式会社　開発技研
遺構測量	株式会社　知立造園CUBIC事業部青森営業所
空中写真撮影	有限会社　無限
遺物の写真撮影	有限会社　無限
遺物写真切抜・回転	株式会社　知立造園CUBIC事業部青森営業所
モザイク写真作成	有限会社　無限

8　遺跡周辺の地形・地質及び出土火山灰の原稿執筆は佐々木実調査員（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師）に依頼した。

9　放射性炭素年代測定及び原稿執筆は株式会社加速器分析研究所に、木材の樹種同定及び原稿執筆は株式会社パレオ・ラボに依頼した。

10　石器の石質鑑定は根本直樹氏の協力を得た。

11　発掘調査成果の一部は、現地見学会、あおもり発掘フェア等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。

12　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

13　本書に掲載した遺跡位置図等は、国土地理院発行の25,000分の１電子地形図を複写して使用した。

14　測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標第Ｘ系による。

15　挿図中の方位は、世界測地系（JGD2011）の座標北を示している。

16　全体図等の縮尺は、原則として調査区域図は１/2,500、遺構配置図は１/500に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

17　遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は以下のとおりである。

　　SI－竪穴建物跡　SB－掘立柱建物跡　SP－柱穴　SK－土坑

　　SD－溝跡（円形周溝）　SE－井戸跡　SX－性格不明遺構

18　遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海抜標高を付した。

19　遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

20　遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。その他は、挿図毎に凡例を示した。

　　■：柱の当たり

21　基本層序の層序番号にはローマ数字を、遺構内堆積土層の層序番号には算用数字を使用した。

22　基本層序・遺構内堆積土層の色調表記等には、小山正忠・竹原秀雄（2006）『新版標準土色帖』を使用した。また、降下火山灰について、十和田-八戸テフラをTo-H、十和田ａテフラをTo-a、白頭山－苫小牧テフラをB-Tmと記載した。

23　遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は以下のとおりである。

　　Ｐ－土器　Ｓ－石器　Ｃ－炭化材

24　遺物実測図には、挿図毎に１から通しの図番号を付した。

25　遺物実測図の縮尺は、原則として1/3に統一し、挿図毎にスケール等を示した。

26　遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。その他は、挿図毎に凡例を示した。

　　■：スリ

27　遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した、石器、土製品等の計測値は、長さ×幅×厚さ（㎝）・重さ（g）の順に表記したが、（　）内の数値は現存値である。

28　縄文原体は山内清男（1979）『日本先史土器の縄紋』を参考にし、記述はそれに従った。土器観察表の表記は以下とした。

　　側面圧痕→側圧、単軸絡条体第〇類→単絡〇、結節回転文→結回

29　遺物写真の各番号は、遺物実測図と共通番号を付した。

30　遺物写真の縮尺は、原則として遺物実測図と同様とした。

31　発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の機関及び個人から御指導、御協力を得た（敬称略、五十音順）。

　　青森市教育委員会、根本直樹

目　次

序
例　言・凡　例
目　次
挿図目次・表目次・写真図版目次

第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　発掘調査の経過と方法……1
　第３節　整理等作業の経過と方法……3
第２章　遺跡の位置と環境……6
　第１節　地理及び歴史的環境……6
　第２節　周辺の地形及び地質……10
第３章　調査の成果……15
　第１節　概要……15
　第２節　基本層序……15
　第３節　縄文時代の遺構……19
　第４節　平安時代の遺構……20
　第５節　近世以降の遺構……22
　第６節　時期不明の遺構……23
　第７節　遺構外出土遺物……31
第４章　自然科学分析……36
　第１節　郷山前村元遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）……36
　第２節　木材の樹種同定……40
　第３節　郷山前村元遺跡出土の火山灰について……43
第５章　総括……46
　第１節　平安時代の遺物について……46
　第２節　平安時代の遺構について……46
　第３節　郷山前村元遺跡の変遷について……52
引用・参考文献……55
遺構計測表・観察表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

図１　遺跡位置図……8
図２　路線図・調査区域図……14
図３　基本層序図……17
図４　遺構配置図……18
図５　土坑……25
図６　竪穴建物跡……26
図７　円形周溝・性格不明遺構（１）……27
図８　掘立柱建物跡・柱穴……28
図９　井戸跡……29
図10　性格不明遺構（２）……30
図11　遺構外出土遺物（１）……34
図12　遺構外出土遺物（２）……35
図13　郷山前村元遺跡周辺出土の「大」字刻書土器……47
図14　郷山前村元遺跡周辺出土の坏底面刻書土器（１）……48
図15　郷山前村元遺跡周辺出土の坏底面刻書土器（２）……49
図16　円形周溝集成……51
図17　郷山前村元遺跡周辺の地形……54

表目次

表１　郷山前村元遺跡と周辺の遺跡一覧……9
表２　遺構計測表……56
表３　縄文土器観察表……57
表４　土師器観察表……57
表５　須恵器観察表……58
表６　磁器観察表……58
表７　石器観察表……58
表８　土製品観察表……58

写真図版目次

写真１　調査区全景……59
写真２　遺跡遠景……60
写真３　遺跡近景・調査状況……61
写真４　基本層序……62
写真５　縄文時代の遺構（土坑）・平安時代の遺構（竪穴建物跡（１））……63
写真６　平安時代の遺構（竪穴建物跡（２））……64
写真７　平安時代の遺構（円形周溝）……65
写真８　平安時代の遺構（性格不明遺構）……66
写真９　近世以降の遺構（掘立柱建物跡）……67
写真10　時期不明の遺構（井戸跡（１））……68
写真11　時期不明の遺構（井戸跡（２）・性格不明遺構）……69
写真12　出土遺物……70

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

常海橋銀線道路改築事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、青森県教育庁文化財保護課（以下、「文化財保護課」）と青森県県土整備部道路課及び東青地域県民局地域整備部（以下、「事業者」）が平成22年度から継続的に協議及び現地確認を行っており、状況が整い次第、文化財保護課が試掘・確認調査を実施してきた。これまでには、郷山前村元遺跡、熊沢溜池遺跡、山元（３）遺跡、樽沢村元（３）遺跡、樽沢上野遺跡及びその隣接地で順次試掘・確認調査が実施され、遺跡の範囲変更や新規登録が行われている（青森県教育委員会2012・2014・2015・2021・2024）。

郷山前村元遺跡は、平成26年度に行われた文化財保護課による試掘調査の結果、平安時代の遺構と遺物が確認され、遺跡の範囲が変更された（青森県教育委員会2015）ことから、平成28年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した（青森県教育委員会2018）。その後、平成28年度発掘調査区の西区域を令和３年度に文化財保護課が試掘調査を行ったところ、遺構（土坑・溝跡・ピット）と平安時代の遺物が確認された（青森県教育委員会2022）。この試掘結果を受けて、令和４年度に文化財保護課と事業者が協議を行い、現状保存が困難であることから、令和５年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなった。

なお、文化財保護法第94条第１項による土木工事等のための発掘に関する通知は、東青地域県民局長から令和５年４月12日付けで提出され、これを受けて工事着手前の本発掘調査実施に係る指示が、青森県教育委員会教育長から令和５年４月26日付け青教文第136号で通知されている。

また、本事業ではこれまでに、本遺跡の他、熊沢溜池遺跡、上野遺跡、樽沢村元（３）遺跡の発掘調査が行われ、『熊沢溜池遺跡　上野遺跡Ⅲ　郷山前村元遺跡』（青森県教育委員会2018）、『樽沢村元（３）遺跡』（青森県教育委員会2023）の２冊の報告書が刊行されている。

第２節　発掘調査の経過と方法

１　発掘調査の体制と経過

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所　長	渡部　泰雄
次　長	稲葉　克徳
総務ＧＭ	佐藤　真理
調査第一ＧＭ	鈴木　和子
総括主幹	浅田　智晴（発掘調査担当者）
文化財保護主幹	平山　明寿（発掘調査担当者）
文化財保護主事	折登　亮子（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員　齋藤　淳	中泊町博物館館長（考古学）

〃　　佐々木　実　　国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）

発掘調査は、1,800㎡を調査対象面積として、５月９日から７月28日までの期間で行った。発掘作業の経過、業務委託状況は、以下のとおりである。

４月７日　　事業者、文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。

４月下旬　　調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置等、事前の準備作業を行った。

５月９日　　発掘器材等を現地に搬入し、環境整備後、調査区域の東側から発掘作業を開始した。

５月中旬　　表土以下遺構確認面までは遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して効率的に掘削した。古代の竪穴建物跡・円形周溝等の遺構を確認した。遺物の出土は散発的であった。測量基準点・水準点を業者に委託して設置し、これに基づいて４ｍ単位のグリッドを設定した。気温が30℃を超える日が出始めた。

５月下旬　　調査区中央にある柱穴の集中は掘立柱建物跡であることが判明した。円形周溝脇から略完形の土師器坏が出土した。

６月上旬　　上記の坏は底面に「大」の刻書が施されており､倒木痕中の凹地を利用した遺構（SX01）に伴うことが分かった。調査区南西に土層観察用のトレンチを深掘りし、基本層序を確認した。急な降雨が発生する機会が増えたため、調査区付近にテントを設置した。

６月下旬　　重機によりⅢ層（漸移層）を除去した。調査区中央にあった大型の撹乱と思われていたものは井戸跡であることを確認した。

７月８日　　現地見学会を開催した。約160名の見学者が訪れ、盛況であった。

７月11日　　事業者、文化財保護課と発掘現場の終了に向けて打合せを行い、安全対策のための発掘現場の埋め戻し箇所等についての確認をした。

７月中旬　　委託によりドローンを使用して調査区域の全体写真を撮影した。７月18日・21日に調査員の現地指導を受けた。

７月下旬　　井戸枠に使われた木材の放射性炭素年代測定・樹種同定を委託するためサンプルを採取した。

７月28日　　発掘器材・出土品を搬出し、全ての発掘作業を終了した。

９月下旬　　井戸枠に使われた木材の樹種同定を委託した。

11月上旬　　遺物の洗浄作業を行った。発掘作業で作成した一部の図面類の整理作業を行った。

11月下旬　　放射性炭素年代測定を委託した。

１月上旬　　遺物の洗浄作業を終え、注記作業を行った。

２月下旬　　遺物の注記作業を終え、遺構毎に収納した。

２　発掘調査の方法

令和３年度に文化財保護課が実施した試掘・確認調査により、遺構（土坑・柱穴・溝跡）が確認されているため、遺構調査に重点をおいて、遺構の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用し

た。

[測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定] 調査対象区域内に測量基準点を測量業者に委託して設置し、これを基準として４×４ｍのグリッドを設定した。

グリッド原点と呼称は平成28年度調査と同様とした。即ち、各グリッドは北から南方向にローマ数字（Ⅰ～Ⅲ）とアルファベット（Ａ～Ｙ）を、東から西方向に算用数字を１から付け、北東隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標（世界測地系）は、原点ⅠＡ―１はＸ＝79,500.000・Ｙ＝-23,440.000とし、ⅢⅠ―107はＸ＝79,268.000・Ｙ＝23,864.000、ⅢＧ―96はＸ＝79,276.000・Ｙ＝23,820.000等である。

測量基準点は４級基準点を４点打設し、MT.1（世界測地系でＸ＝79,265.739・Ｙ=-23,852.285・Ｚ=29.823)、MT.2（同Ｘ=79,279.184・Ｙ=-23,835.001・Ｚ=30.551)、MT.3（同Ｘ=79,266.700・Ｙ=-23,805.011・Ｚ=31.198)、MT.4（同Ｘ=79,280.820・Ｙ=-23,791.132・Ｚ＝31.736）を基準点として使用した。

[基本層序] 基本層序は上位からⅠ層、Ⅱ層とローマ数字を付した。細分が必要な場合は小文字のアルファベットや枝番号等を付けた。

[表土等の調査] 令和３年度の試掘・確認調査により、表土から遺構確認面までは遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜グリッド単位で層位毎に取り上げた。

[遺構の調査] 検出遺構には、平成28年度調査で付した遺構番号に続けて、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態・大きさ等に応じて、基本的には４分割又は２分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本層序と区別した。

遺構図は平面・断面共にトータルステーションによる測量で得た３次元座標データを元に、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。遺構の堆積土層断面図等は、縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位で層位毎に又は堆積土一括で取り上げた。

[写真撮影] 写真撮影は原則として35mmモノクロームフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム及び約2,620万画素のフルサイズデジタル一眼レフカメラ、1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。遺跡及び調査区全体等は業者に委託してドローンによる空中写真撮影を行った。

第３節　整理等作業の経過と方法

１　整理等作業の体制と経過

整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター

所長	渡部　泰雄
総務ＧＭ	猪股　幸康
調査第二ＧＭ	神　　康夫
文化財保護主幹	平山　明寿（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言
調査員　齋藤　淳　　中泊町博物館館長（考古学）
〃　　佐々木　実　　国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）

整理・報告書作成作業は、令和６年４月１日から令和７年３月31日までの期間で行った。整理・報告書作成作業の経過・業務委託状況等は、以下のとおりである。

４月　　土器・石器の数量計測を行い、遺物の接合・復元作業を進めた。併せて、遺構の検討・整理作業を開始し、遺構一覧表等を作成した。
５月　　土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行った。遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表の作成を開始した。
６月　　選別した報告書掲載遺物実測・拓本等の図化作業を進めた。また、出土火山灰の原稿執筆を依頼した。
７～８月　　遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等の調整を行った。
９月　　図化作業が終了した遺物から、順次トレースを行った。トレースが終了した遺構・遺物については、版下を作成した。
９月下旬　　委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行った。また、遺跡周辺の地形及び地質について原稿執筆を依頼した。
10月下旬　　遺物写真の回転・切り抜き作業を委託した。写真図版を作成した。
11月上旬　　調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。
11月下旬　　空撮写真のモザイク写真作成を委託した。
12月上旬　　原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を選定して入稿した。
２月上旬　　記録類・出土品の収納作業を開始した。
３月12日　　３回の校正を経て、報告書を刊行した。
３月下旬　　記録類・出土品を収納した。

２　整理等作業の方法

調査の結果、縄文時代の土坑３基、平安時代の竪穴建物跡１棟・円形周溝１基・性格不明遺構１基、近世以降の掘立柱建物跡１棟・柱穴７基、時期不明の井戸跡２基・性格不明遺構１基の遺構が検出され、縄文時代の土器・石器、平安時代の土器及び近世以降の陶器・磁器等が段ボール箱で２箱出土した。平安時代の集落の時期・構造等を解明するため、竪穴建物跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷等の検討に重点をおいて整理・報告書作成作業を進めた。

［図面類の整理］ 遺構図は株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用い、平面図と堆積土層断面図の調整・計測を行った。図面の測量点等については、エクセルファイル（.xlsx形式及び.csv形式）でハードディスク及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。また、遺構台帳や遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

［写真類の整理］ 35mmモノクロームフィルムと35mmカラーリバーサルフィルムは撮影日順に整理し

てネガアルバムに収納した。デジタル写真はファイル名を撮影内容・方向に変更し、遺構順に整理した。長期保存用写真データは、RAWデータをデジタル現像して変換した非圧縮Tiffデータ、RAWデータ、Jpegデータを、メモ写真はJpegデータをハードディスク及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元] 縄文時代の遺構出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、グリッド、遺構名、出土層位、取上げ番号等を略記した。直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層位等の整理を怠らないようにした。

[報告書掲載遺物の選別] 遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放棄）された資料、遺構の構築・廃絶時期を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・形式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

[遺物の観察・図化] 資料は表面を充分に観察した上で、各遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

[遺物の写真撮影] 業者に委託して行ったが、実測図では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

[自然科学分析] 遺構の年代を特定するために放射線炭素年代測定を業者に委託して行った。また、井戸枠の部材を特定するため樹種同定を業者に委託して行った。出土火山灰の分析を佐々木実調査員（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師）に依頼した。

[遺構・遺物のトレース・版下作成] 遺構・遺物の実測図やその他挿図のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構・遺物実測支援システム」とAdobe社製「Illustrator」を用いた。拓本の切抜は、Adobe社製「Photoshop」、図版の版下作成は、Adobe社製「Illustrator」・「InDesign」を用いた。遺物写真の切り抜き作業は委託により行った。

[遺構の検討・分類・整理] 遺構毎に種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

[遺物の検討・分類・整理] 遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土状況・特徴を検討した。

[調査成果の検討] 遺構・遺物の検討結果を踏まえて、集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

[遺物の収納] 遺物は報告書掲載遺構名を基に収納した。このため、収納箱に記載している遺構名と注記は異なっているものがある。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理及び歴史的環境

郷山前村元遺跡は、ＪＲ奥羽線浪岡駅から西に２㎞程の、津軽平野を望む標高約30ｍの丘陵上に位置する。遺跡の所在する青森市は青森県のほぼ中央に位置し、北は陸奥湾の支湾である青森湾、南～東は奥羽山脈北端の八甲田山や東岳山地、西は津軽山脈南端の梵珠山地や津軽平野と面しており、津軽地方としては北東部にあたる。青森市浪岡は、北は五所川原市、西は板柳町と藤崎町、南は黒石市に接する青森市の南西部にあたり、平成17年（2005）に青森市と新設合併した旧浪岡町である。旧浪岡町地域では、東北自動車道、国道７号浪岡バイパス、津軽自動車道（国道101号浪岡五所川原道路）等の建設事業に伴い、数多くの遺跡が調査されている。これまでに確認された遺跡の時代は、縄文時代から中・近世に至るが、平安時代に関するものが圧倒的に多く、郷山前村元遺跡から東約２kmの道の駅「なみおか」付近から北へ約３㎞の間には、大釈迦川右岸に面した丘陵縁辺に平安時代の集落が連続して立地している。うち、高屋敷館遺跡が史跡となっている。また、郷山前村元遺跡の東約４kmには中世に北畠氏が居城とした史跡浪岡城跡が所在しているほか、北方約５㎞の五所川原市内には平安時代の史跡五所川原須恵器窯跡が所在している。

郷山前村元遺跡周辺では、縄文時代の集落跡の存在は希薄であり、遺物包含層や貯蔵穴が散在する様子が窺われる。縄文時代早期では寺屋敷平遺跡で早稲田５類の遺物が出土している。前期では、下石川平野遺跡で前期後半の竪穴建物跡とともに断面形状がフラスコ形を主体とする土坑群や捨て場を含む遺物包含層が、浪岡蛍沢遺跡で土器埋設遺構やフラスコ状土坑が検出されている。中期では、上野遺跡で掘立柱建物跡が検出されている。後期では、中平遺跡で亀甲形の掘立柱建物跡や貯蔵穴等が検出されており、それらは環状に巡ると推測されている。また、浪岡蛍沢遺跡で後期後葉～晩期のフラスコ状土坑が検出されている。

旧浪岡町地域で調査された平安時代の遺跡の特徴として、竪穴建物跡に掘立柱建物跡とそれらを取り囲む外周溝を伴う事例や、製鉄関連遺構、円形周溝などの検出例が多い事が挙げられる。遺物の主体は土師器であるが、連弁・蓮華文が墨書された坏、馬の絵が線刻された甕、擦文土器の特徴を部分的にもつものなども存在する。須恵器は他地域よりも出土量が多いが、これは前述の五所川原須恵器窯跡との関連性が考えられている。土器以外では、木椀・硯・製鉄関連遺物や錫杖状鉄製品・鉄繞などの宗教的遺物などや、銅鋺や銅製の柄頭などの律令的遺物が特筆される遺物である。他に注目されるものは、井戸跡（寺屋敷平遺跡）、土師器製作遺構・土師器焼成遺構・銅製鈴・馬を模した土製品（中平遺跡）、緑釉陶器片（上野遺跡）、錫杖頭状土製品（旭（１）遺跡）がある。

近世の遺構は、上野遺跡で近世街道の「下之切通り」と推定される道路跡が確認された。また、長溜池遺跡で土葬墓が検出されている。

近隣する五所川原市内の遺跡では、五所川原須恵器窯跡の中でも初期の窯跡と考えらえるＫＹ１号窯跡（広野遺跡）や、国道101号浪岡五所川原道路（津軽自動車道）建設で調査され、須恵器製作に携わる工人に関連する集落と考えられている隠川（４）・(12）遺跡等がある。

郷山前という地名の記述は、「津軽郡中名字」[1)] や寛文４年（1664）「徳川家綱領地目録　津軽信

政宛　継紙」[2)]、貞享２年（1685）「陸奥国津軽郡之絵図」[3)]には見られない[4)]。一方、「郷村高辻帳」[5)]には宝永８年（1711）に寛文４年（1664）以降の新田、享保９年（1724）に宝永年中御改以後の新田として記載され、延宝６年（1678）「惣御足軽知行高并支配分定」[6)]中の「牧多太右衛門支配」に「郷山枚村万助」「郷山枚村茂右衛門」の記述がある。また、天保９年（1838）「天保陸奥国津軽領絵図」[7)]や「常磐組増館組絵図」[8)]（年代不詳）には記載されていることから、江戸中期までに創設された村と推測される。史料によっては下江三枚・江山前・江三枚・江三前・後三昧・後山前とも記載される。なお、地区内に鎮座する八幡宮は延宝６年（1678）建立と伝えられている。

当地は、近世は弘前藩の田舎庄増館組に属した「郷山前村」であり、近世街道の下之切通り[9)]沿いの村落であった。「郷山前村」は明治４年（1871）に弘前県、次いで青森県の所属となり、明治６年（1873）に五大区一小区の一部となったが、明治22年（1889）に隣接する樽澤村・銀村・吉野田村と合併して野澤村となった。明治27年（1894）に旧郷山前村の一部が富木館村（現藤崎町）へ編入したが、昭和29年（1954）浪岡町と合併し、更に平成17年（2005）に青森市と新設合併した。近世末には藩政による漆栽培が行われ、近代（明治20年以降か）にはりんご栽培が盛んになった地域である。

図１に本遺跡を含む周辺の遺跡を示した。郷山前村元遺跡は、過去に文化財保護課による試掘調査（青森県教育委員会2012・2014・2015・2021・2024）や、当センターによる本発掘調査（青森県教育委員会2018）が実施されており、縄文時代前期・後期・晩期の遺物の他、平安時代の円形周溝６基、溝跡３条、土坑２基が検出されている。

今回の調査区は平成28年度調査区の西で、幅約15m・長さ約95mのほぼ長方形である。標高は30m前後で、東から西に向かって緩やかに下る傾斜がある。調査開始前の土地利用状況は果樹園と畑地であった。なお、本報告と同じ常海橋銀線道路改築事業では、平成27年度から上野遺跡・熊沢溜池遺跡・樽沢村元（３）遺跡が調査されている。

註

１）№1758「津軽郡中名字」『青森県史　資料編　中世３』（青森県2012）

２）№78「徳川家綱領地目録　津軽信政宛　継紙」（寛文４年（1664）４月５日）『青森県史　資料編　近世２』（青森県2002）

３）付図１「陸奥国津軽郡之絵図」（貞享２年（1685）写）『青森県史　資料編　近世１』（青森県2001）

４）「津軽領元禄国絵図」（弘前大学附属博物館蔵）は未見のため不明。

５）「郷村高辻帳」『浪岡町史資料編　第14集』（浪岡町役場1984）

６）№157「惣御足軽知行高并支配分定」（延宝６年（1678））『青森県史　資料編　近世２』（青森県2002）

７）付図１「天保陸奥国津軽領絵図」（天保９年（1838））『青森県史　資料編　近世３』（青森県2006）

８）絵図４「常磐組増館組絵図」『浪岡町史　別巻Ⅰ』（浪岡町2002）

９）青森県道34号五所川原浪岡線がほぼ踏襲していると考えられる（青森県教育委員会1984）。

遺跡位置
青森市
五所川原市
板柳町
藤崎町
黒石市
田舎館村
398
電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成
0
1,000
2,000
3,000
4,000m
1/50,000

図1　遺跡位置図

表１　郷山前村元遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時代																種別	備考
		旧石器	縄文							弥生	古墳	続縄文	奈良	平安	中世	近世	近代		
			草	早	前	中	後	晩	詳細不明										
201329	大堤沢遺跡						○	○						○				散布地	
201330	高屋敷館遺跡						○	○		○				○				散布地、集落	史跡
201331	下下平遺跡						○							○				散布地	
201332	旭(1)遺跡			○	○		○							○				散布地、集落	
201333	旭(2)遺跡						○	○						○				散布地、集落	
201334	中平遺跡			○	○	○	○	○						○				散布地、集落	
201335	浪岡蛍沢遺跡				○	○	○	○						○				散布地、集落	
201336	熊沢溜池遺跡				○			○						○				散布地、集落	
201337	永原遺跡				○		○											散布地	
201338	上野遺跡			○	○	○	○							○	○	○		散布地、集落、墓	
201339	神明宮遺跡				○			○						○				散布地、集落	
201340	山神宮遺跡							○										散布地	
201341	長溜池遺跡					○	○	○		○				○	○			散布地、墳墓	
201342	大林遺跡								○					○				散布地	
201343	大沼遺跡													○				散布地	
201344	羽黒平(1)遺跡								○	○				○				散布地、集落	
201345	羽黒平(2)遺跡							○						○	○			散布地	
201346	羽黒平(3)遺跡							○						○	○			散布地、集落	
201347	浪岡城跡													○	○			城館	史跡
201348	加茂神社遺跡						○							○	○			散布地、集落	
201349	沖林遺跡													○				散布地	
201350	浪岡崎(1)遺跡													○				散布地	
201351	浪岡崎(2)遺跡							○										散布地	
201354	源常平遺跡					○	○	○						○	○	○		散布地、集落、城館	
201363	桃里(1)遺跡													○				散布地	
201365	杉ノ沢遺跡						○							○				散布地、集落	
201366	吉内遺跡								○	○				○				散布地、集落	
201367	中屋敷遺跡						○	○						○				散布地、集落	
201368	篠原遺跡						○			○								散布地、集落	
201370	本郷遺跡								○									散布地	
201371	松元遺跡				○	○	○							○				散布地、集落	
201372	本郷八幡宮遺跡				○	○	○							○				散布地	
201374	王田館遺跡													○				城館	
201376	山本(1)遺跡				○	○	○							○				散布地、集落	
201377	川原館遺跡					○								○	○			散布地、城館	
201378	銀館遺跡														○			城館	
201379	北畠館														○			城館	
201381	山元(1)遺跡				○		○							○				散布地、集落	
201382	山元(2)遺跡					○	○	○						○				散布地、集落	
201383	山元(3)遺跡			○	○	○	○	○						○				散布地、集落	
201385	杉田遺跡													○				散布地	
201386	寺屋敷平遺跡			○	○		○	○						○				散布地、集落	
201387	野尻(1)遺跡			○	○		○	○		○				○				散布地、集落	
201388	野尻(2)遺跡				○	○	○	○						○				散布地、集落、墓	
201389	野尻(3)遺跡				○		○			○				○	○	○		散布地、集落、墓	
201390	野尻(4)遺跡				○		○	○						○	○	○		散布地、集落	
201391	山元(4)遺跡														○			散布地	
201392	小板橋溜池東遺跡								○					○				散布地	
201393	小板橋溜池西遺跡													○				散布地	
201394	板橋野山遺跡													○				散布地	
201395	宮元遺跡						○	○		○				○				散布地、集落	
201396	本郷館跡													○				城館	
201397	檸沢上野遺跡								○					○				散布地	
201398	郷山前村元遺跡				○	○	●	○						○		●		散布地、集落、墓	
201399	下石川平野遺跡				○	○	○	○						○				散布地、集落	
201400	浪岡城遺跡													○	○	○		城館	
201401	岡本遺跡													○	○	○		集落	
201407	桃里(2)遺跡						○							○				散布地	
201410	女鹿沢遺跡													○				散布地	
201411	銀前田遺跡													○				散布地	
201412	檸沢村元(1)遺跡								○					○				散布地	
201413	杉沢板橋野山遺跡					○	○							○				散布地	
201414	岡田遺跡													○				散布地	
201415	西増田遺跡								○					○				散布地	
201416	大沼袋遺跡													○				散布地	
201417	社元遺跡													○				散布地	
201423	吉野田平野遺跡													○				散布地	
201424	天王遺跡													○				散布地	
201425	扇田遺跡													○				散布地	
201428	中道遺跡													○				集落、社寺	
201429	東早稲田遺跡													○				散布地	
201434	荷越沢遺跡				○		○	○										散布地	
201435	女鹿沢野尻遺跡													○				散布地	
201436	檸沢村元(2)遺跡													○				散布地	
201438	本郷松元遺跡													○				散布地	
201445	檸沢村元(3)遺跡			○	○		○							○		○		散布地、集落	
201449	北中野遺跡													○	○	○		散布地	
201455	檸沢村元(4)遺跡													○				散布地	
201456	檸沢上野(2)遺跡													○				散布地	

図１に示した遺跡のうち、青森市域内のみ抜粋
●調査結果から加筆した時代

第２節　周辺の地形及び地質

弘前大学大学院理工学研究科　佐々木　実

１　位置および地形・地質の概要

郷山前村元遺跡は青森市浪岡に所在し、津軽半島南部、梵珠山地南端部と津軽平野の境界部に分布する台地上に位置する。遺跡周辺の地形図および地形段彩陰影図を図１（a）および（b）にそれぞれ示す。遺跡周辺の標高20～30ｍであり、周囲には台地を下刻する谷をせき止めた溜池（熊沢溜池、宝溜池）が分布する。台地の東側は梵珠山地南端部の標高75～100ｍの尾根が南北に伸び、西側には標高20ｍ未満の津軽平野が広がる。遺跡調査範囲は水野・堀田（1983）の地形分類図では大部分が「前田野目台地Ⅲc-GtⅡ（中位）面」に、西縁部の標高25ｍ未満の部分は「前田野目台地Ⅲc-GtⅢ（下位）面」に分類されている。岩井ほか（1983）の表層地質図においては、大部分が「岡町層・前田野目層」の粘土・砂・礫からなる未固結堆積物が、西縁部は「扇状地・段丘堆積物」が分布するとされている。５万分の１地質図幅「青森西部」（長森ほか, 2013）においては「高位段丘堆積物」が分布するとされている。長森ほか（2013）は、吾妻（1995）に基づき本堆積物により構成される段丘面の形成年代を酸素同位体ステージ７（22-20万年前）としている。また長森ほか（2013）は、本遺跡東縁を西落ち逆断層である「大平断層」の一部とし、また台地が南西方向に緩傾斜していることを活撓曲の影響としている。

２　地質柱状図

郷山前村元遺跡調査地域内の２地点において地層断面の観察を行い柱状図を作成した。結果を図２に示す。

①は暗褐色土壌で、層厚は地表から60㎝である。基本層序のⅠ～Ⅲ層に相当する。別に行われた火山灰分析により、本層中に白頭山苫小牧テフラ（B-Tm）および十和田aテフラ（To-a）に由来する粒子を含む火山灰層を挟在することがわかった（第４章第３節）。

②は淡褐色を呈する塊状の粗粒凝灰岩で層厚は30㎝である。③は灰色を呈する凝灰質シルト岩で層厚は５㎝である。基本層序のⅣ層に相当する。

④は塊状の粗粒凝灰岩からなる。淡灰褐色を呈する部分に淡灰色を呈する部分が脈状に分布している。層厚は30㎝である。基本層序のⅤ層に相当する。

⑤は明灰色を呈する塊状の凝灰質シルト岩で、層厚は50㎝である。基本層序のⅥ層に相当する。

⑥は淡灰褐色～淡褐色の凝灰質シルト岩で、層厚は100㎝である。基本層序のⅦ～Ⅸ層に相当する。

⑦は淡褐色部および淡灰色部からなる粗粒凝灰岩で、層厚は20㎝以上である。基本層序のⅩ層に相当する。

④、⑦に含まれる火山ガラスおよび鉱物の予察的な観察をおこなった。いずれもバブル型ガラスを含み、鉱物として斜長石、普通輝石、直方輝石、普通角閃石および磁鉄鉱を含む。

３　火山灰層の対比

④、⑦はバブル型火山ガラス、斜長石、直方輝石、普通輝石および普通角閃石を含むことから、十和田火山八戸火砕流堆積物（Hayakawa,1985;工藤，2019）に由来すると判断される。岩相から火砕流堆積物の２次堆積物である可能性が高い。長森ほか（2013）も「高位段丘堆積物」が八戸火砕流堆積物に覆われるとしている。

引用文献

吾妻　崇　1995　変動地形からみた津軽半島の地形発達史．第四紀研究　34　75–89．

岩井武彦・大久保貢・沢田庄一郎　1983　土地分類基本調査「青森西部」 各論Ⅱ 表層地質図．青森県　16–26.

工藤　崇　2019　十和田湖地域の地質，第７章　十和田火山噴出物（中部更新統～完新統），地域地質報告（５万分の１地質図幅）　産総研地質調査総合センター　114–154.

水野　裕・堀田報誠　1983　土地分類基本調査「青森西部」，各論Ⅰ 地形分類図　青森県　11–15.

長森英明・宝田晋治・吾妻　崇　2013　青森西部地域の地質．地域地質研究報告（５万分の１地質図幅）　産総研地質調査総合センター，67p．

Hayakawa，Y．（1985）Pyroclastic Geology of Towada Volcano．*Bulletin of the Earthquake Research Institute University of Tokyo*，60，507–592．

(a)

(b)

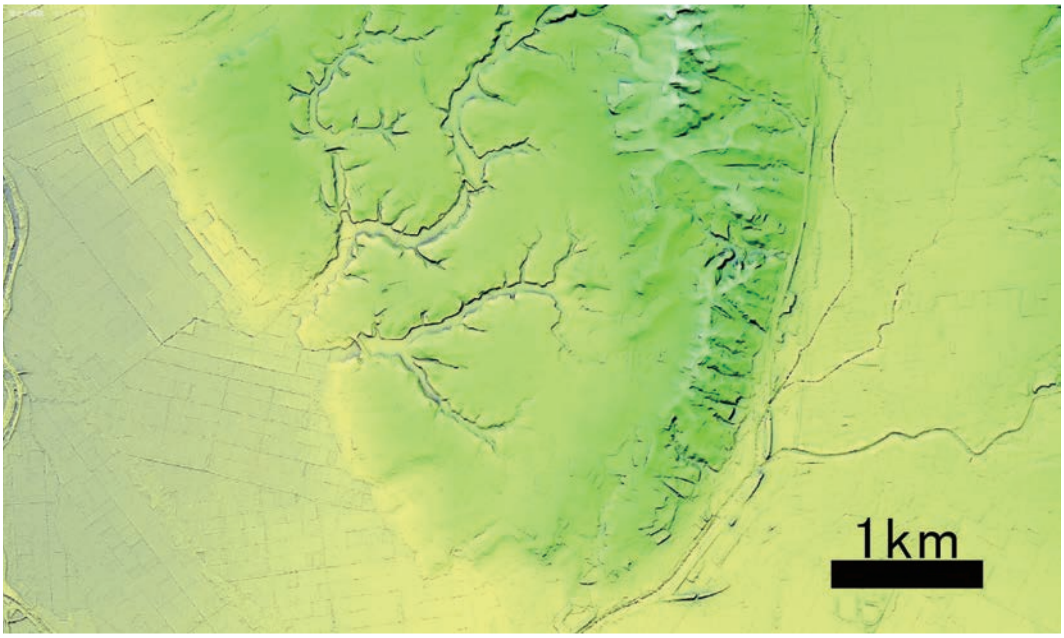


図１
(a)郷山前村元遺跡周辺の地形図.
国土地理院「地理院地図」(https://maps.gsi.go.jp/)のデータから，「カシミール３Ｄ」(http://www.kashmir3d.com/)により作成.
(b)周辺の地形段彩陰影図.「カシミール３Ｄ」(http://www.kashmir3d.com/)の「スーパー地形セット」により作成. 地図の範囲は地形図と同一である.

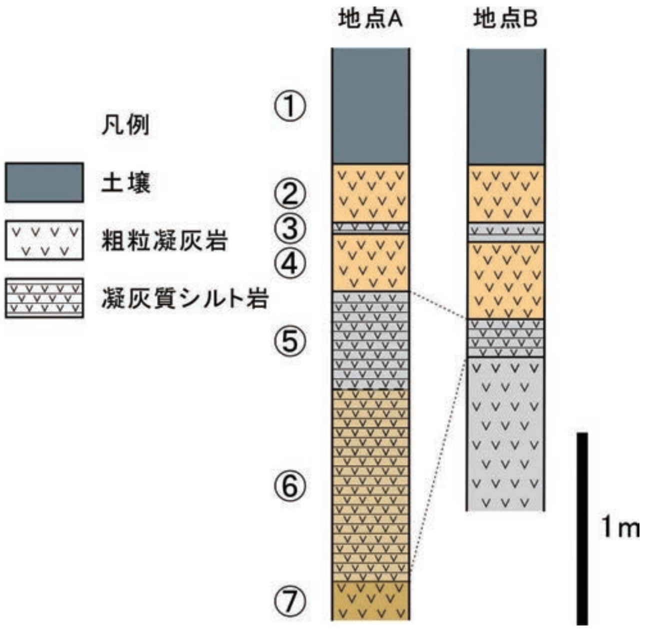
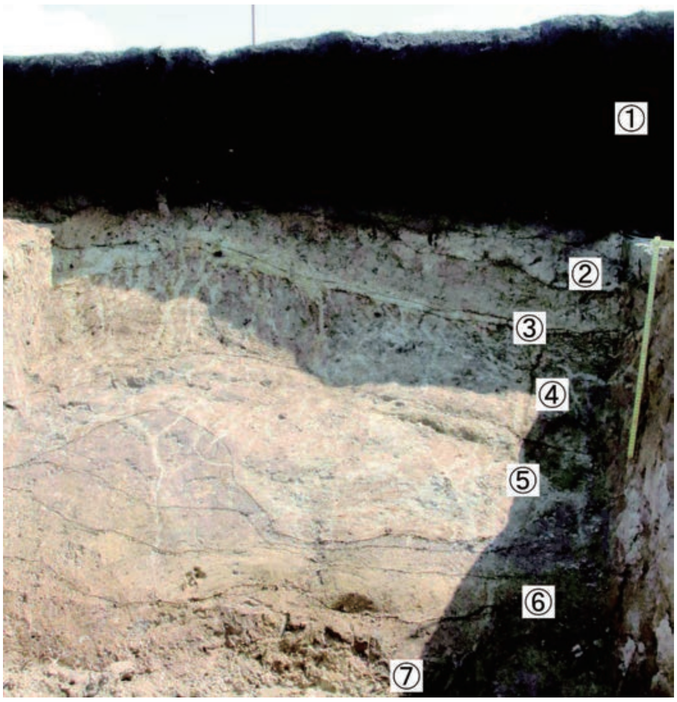
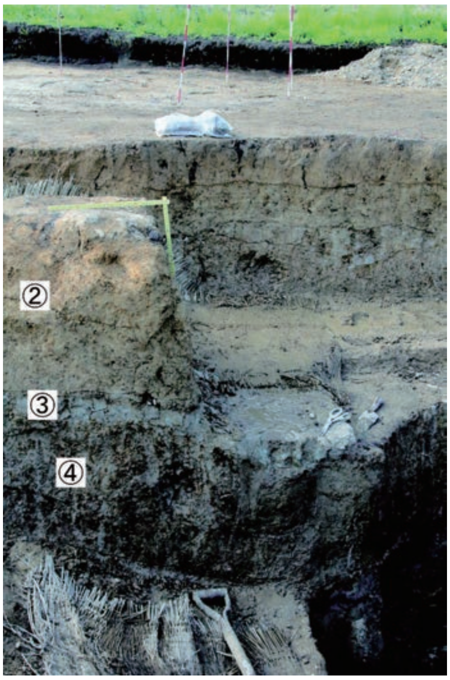


図２　（a）地質柱状図
岩相の詳細は本文に記載

(d)地点Ａ,地点Ｂの位置図
国土地理院「地理院地図」(https://maps.gsi.go.jp/)のデータから,「カシミール３D」（http://www.kashmir3d.com/)により作成.



（b）地点Ａ
折尺は全長１ｍ



（c）地点Ｂ
折尺は全長１ｍ

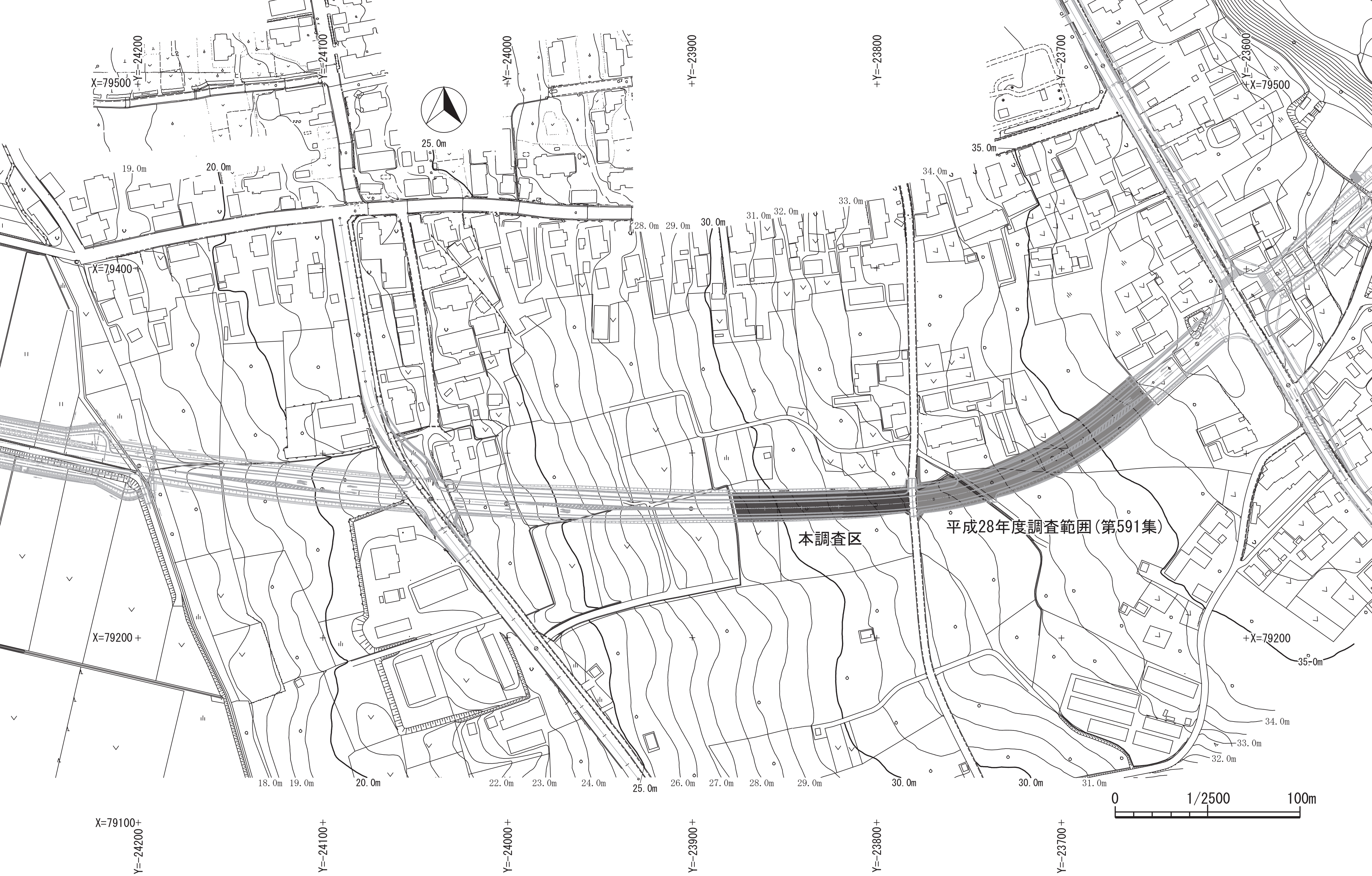


図2　路線図・調査区域図

第３章　調査の成果

第１節　概要

郷山前村元遺跡は、青森市役所浪岡庁舎から西へ約３㎞、梵珠山南麓に広がる標高約18～36ｍの丘陵上に位置する。平成28年度に当センターが遺跡北東端部の標高約32～36ｍの2,600㎡を調査しており、縄文時代の遺物と平安時代の円形周溝・溝跡・土坑を検出した。今回は前回調査区の西側に接する標高約29～32ｍの1,670㎡を調査した。東から西へ下る緩斜面で、眼前に津軽平野と岩木山を望む。現況は果樹園及び畑である。

調査の結果、竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡１棟、柱穴７基、土坑３基、井戸跡２基、円形周溝１基、性格不明遺構２基を検出した。各遺構の帰属時期は、土坑は縄文時代、竪穴建物跡と円形周溝・性格不明遺構の１基は平安時代、掘立柱建物跡と柱穴は近世以降に比定される。井戸跡・性格不明遺構の１基の時期は不明である。竪穴建物跡と円形周溝は、調査区西端に近接して検出しているものの、他の遺構は散漫な配置である。遺構検出面は、柱穴の一部はⅡ層であるが、ほとんどはⅢ層（漸移層）面である。調査区の一部は耕作によって削平されており、特に円形周溝・竪穴建物跡は遺存状況が悪く、ほぼ掘方のみの検出である。倒木痕及び耕作に伴うと推定される撹乱が多い。倒木痕の窪地を利用して構築されていると思われるもの（性格不明遺構）もあるが、倒木痕はほとんどの遺構を切っている。各遺構番号は平成28年度調査の番号から継続して付している。

遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・土製品、近世以降の磁器・陶器などが段ボール箱で２箱出土した。縄文土器は前期・後期・晩期で、Ⅰ・Ⅱ層から出土した。前期・後期は調査区東、晩期は中央北端の特定のグリッドから出土しているが、散漫な出土状況である。遺構内からは遺物はほとんど出土しなかったが、遺構に伴っていた遺物が、倒木痕によって巻き上げられたと推測されるものもある。

第２節　基本層序

調査開始前の土地利用状況は果樹園と畑であり、調査区内には、耕作に伴うと推測される削平箇所が認められる。基本層序は図３・４に示したとおり、調査区南西端地点（Ａ－Ａ’ライン）と第２号井戸跡地点（Ｂ－Ｂ’ライン）の２地点で記録した。層番号は平成28年度調査の郷山前村元遺跡及び上野遺跡を参考にしたものの、異なっている。

表土　10YR2/2　黒褐色土

いわゆる耕作土で、近現代の人為的土地改変層である。粘性・しまりは弱く、根を多く含む。層厚は10～25㎝である。平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅠ層に該当すると考えられる。

Ⅰ層　10YR2/2　黒褐色土

φ1～5㎜の鉄分粒が1％混入する。粘性・しまり弱く、根が混じる。層厚は20～40㎝である。平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅡａ層に該当すると考えられる。

Ⅱ層　10YR2/1　 黒色土

いわゆる黒ボク土層。粘性・しまりは弱い。層厚は10～25㎝である。柱穴のSP01は本層中から検出された。平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅡｂ層に該当すると考えられる。

Ⅲ層　10YR4/3　 にぶい黄褐色土

漸移層である。粘性・しまりやや弱い。ほとんどの遺構の検出面である。層厚は５～15㎝である。表土から本層までが佐々木（本報告書第２章第２節）の①であり、平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅢ－１層に該当すると考えられる。

Ⅳ層　10YR5/6　 黄褐色土

ローム層。本層を遺構の最終確認層とした。一部にぶい黄橙色（10YR7/2）の粘土を含み、２層に細分できる。粘性は弱く、しまりは中程度である。層厚は５～50㎝である。佐々木の②である。細分された上層が平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅢ－２層、下層がⅢ－３層に該当すると考えられる。なお、本層とⅤ層の層理面に佐々木の③が介在しており、Ｂ－Ｂ'ラインの粘土①②がそれに該当すると思われる。

Ⅴ層　10YR6/2　 灰黄褐色土

鉄分の沈着により部分的に褐色（10YR4/6）を呈する。一部灰黄色（2.5Y7/2）の粘土を含み、２層に細分できる。粘性はやや弱く、しまりは中程度である。層厚は15～80㎝である。佐々木の④であり、十和田火山八戸火砕流堆積物に由来し、火砕流堆積物の２次堆積物である可能性が高いとされる。平成28年度調査の上野遺跡のⅥ層に相当すると思われる。

Ⅵ層　10YR6/3　 にぶい黄橙色土

鉄分の沈着により部分的に明黄褐色（10YR6/6）を呈する。部分的に灰白色（10YR7/1）を呈する。粘性は中程度、しまりは強い。層厚は５～45㎝である。佐々木の⑤である。平成28年度調査の上野遺跡のⅦ層に相当すると思われる。

Ⅶ層　10YR5/4　 にぶい黄褐色土

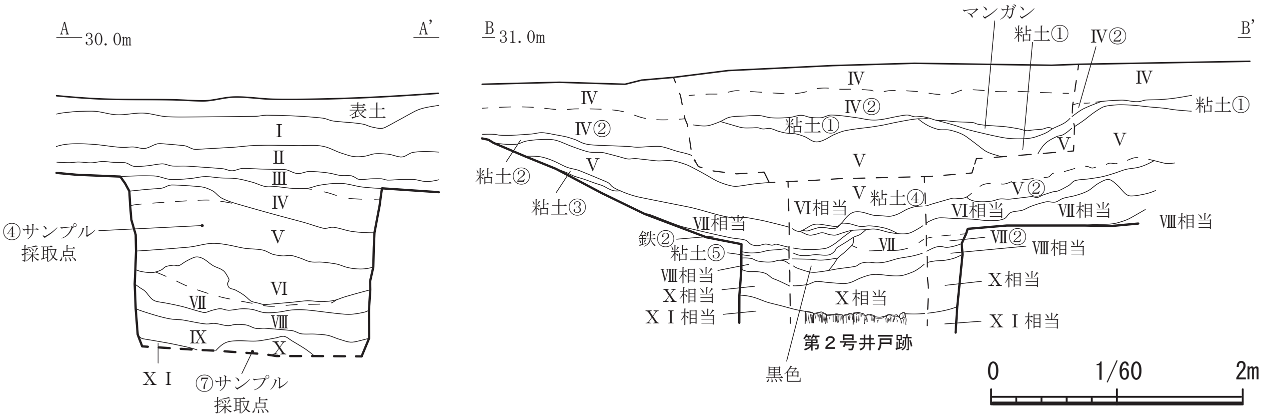
φ1～10㎜のマンガン粒を50％混入する。一部灰褐色（7.5YR5/2）を呈し、２層に細分できる。Ｂ－Ｂ'ラインの鉄②が混入するマンガンが局部的に集中した箇所、粘土③④⑤が細分された上層に相当する可能性がある。粘性は中程度、しまりは強い。層厚は５～45㎝である。佐々木の⑥上部である。Ｂ－Ｂ'ラインの粘土⑤下の黒色土層は植物根痕と推測される。同様のものが平成28年度調査の上野遺跡のⅦ層でも認められる。

Ⅷ層　10YR6/3　 にぶい黄橙色土

φ1～10㎜のマンガン粒を10％混入する。粘性は中程度、しまりは強い。層厚は10～25㎝である。佐々木の⑥中部である。平成28年度調査の郷山前村元遺跡のⅢ－４層に該当する。

Ⅸ層　7.5YR6/3　にぶい褐色土

φ1～30㎜のマンガン粒を30％混入する。鉄分の沈着により部分的に明褐色（7.5YR5/6）を呈する。粘性は中程度、しまりは強い。層厚は５～20㎝である。Ｂ－Ｂ'ラインでは確認されなかった。佐々木の⑥下部である。



基本層序

表土	10YR2/2	黒褐色土	粘性・しまり弱　根を多く含む
Ⅰ層	10YR2/2	黒褐色土	粘性・しまり弱　根が混じる　φ１～５㎜鉄分粒 1%
Ⅱ層	10YR2/1	黒色土	粘性・しまり弱　黒ボク土
Ⅲ層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性・しまりやや弱　漸移層
Ⅳ層	10YR5/6	黄褐色土	粘性弱・しまり中　ローム層　一部にぶい黄橙色（10YR7/2）の粘土を含む
Ⅴ層	10YR6/2	灰黄褐色土	粘性やや弱・しまり中　一部灰黄色（2.5Y7/2）の粘土を含む 鉄分の沈着により部分的に褐色（10YR4/6）を呈する
Ⅵ層	10YR6/3	にぶい黄橙色土	粘性中・しまり強　部分的に灰白色（10YR7/1）を呈する 鉄分の沈着により部分的に明黄褐色（10YR6/6）を呈する
Ⅶ層	10YR5/4	にぶい黄橙色土	粘性中・しまり強　φ１～10㎜マンガン粒 50%　一部灰褐色（7.5YR5/2）を呈する
Ⅷ層	10YR6/3	にぶい黄橙色土	粘性中・しまり強　φ１～10㎜マンガン粒 10%
Ⅸ層	7.5YR6/3	にぶい褐色土	粘性中・しまり強　φ１～30㎜マンガン粒 30% 鉄分の沈着により部分的に明褐色（7.5YR5/6）を呈する
Ⅹ層	2.5Y7/3	浅黄色土	粘性強・しまり中　粘土層 鉄分の沈着により部分的に明黄褐色（10YR6/8）を呈する
Ⅺ層	7.5YR5/4	にぶい褐色土	粘性・しまり中　　粘土層

今回調査

層名	土色	備考
表土	黒褐色土	耕作土
Ⅰ	黒褐色土	
Ⅱ	黒色土	黒ボク
Ⅲ	にぶい黄褐色土	漸移層
Ⅳ	黄褐色土	細分された上層 細分された下層 Ⅳ～Ⅴの層理面 B-B'ラインの粘土①②
Ⅴ	灰黄褐色土	２層に細分できる
Ⅵ	にぶい黄橙色土	
Ⅶ	にぶい黄橙色土	B-B'ラインの粘土③④⑤・鉄②・黒色層は細分された下層に相当?
Ⅷ	にぶい黄橙色土	
Ⅸ	にぶい褐色土	B-B'ラインにはない
Ⅹ	浅黄色土	
Ⅺ	にぶい褐色土	

佐々木（第２章第２節）

層名	土色	土質	備考
①	暗褐色	土壌	
②	淡褐色	粗粒凝灰岩	
③	灰色	凝灰質シルト岩	
④	淡灰褐～淡灰色	粗粒凝灰岩	サンプル採取 To-H2次堆積
⑤	明灰色	凝灰質シルト岩	
⑥	淡灰褐～淡褐色	凝灰質シルト岩	
⑦	淡褐～淡灰色	粗粒凝灰岩	サンプル採取 To-H2次堆積

平成28年度調査 郷山前村元遺跡	平成28年度調査 上野遺跡		
層名	層名	土色	備考
Ⅰ	Ⅰ	黒褐色	
Ⅱａ	Ⅱａ	黒褐色	
Ⅱｂ	Ⅱｂ	黒色	
Ⅲ－１	Ⅲ	黒色 黄褐色	漸移層
Ⅲ－２	Ⅳ	明黄褐色 黄褐色	
Ⅲ－３	Ⅴ	明黄褐色 浅黄色	酸化による染み To-Hか
未確認	Ⅵ	にぶい横橙 灰白	
未確認	Ⅶ	灰 灰オリーブ	部分的に有機質の黒色部あり
Ⅲ－４	Ⅷ	黄褐色 褐色	

図３　基本層序図

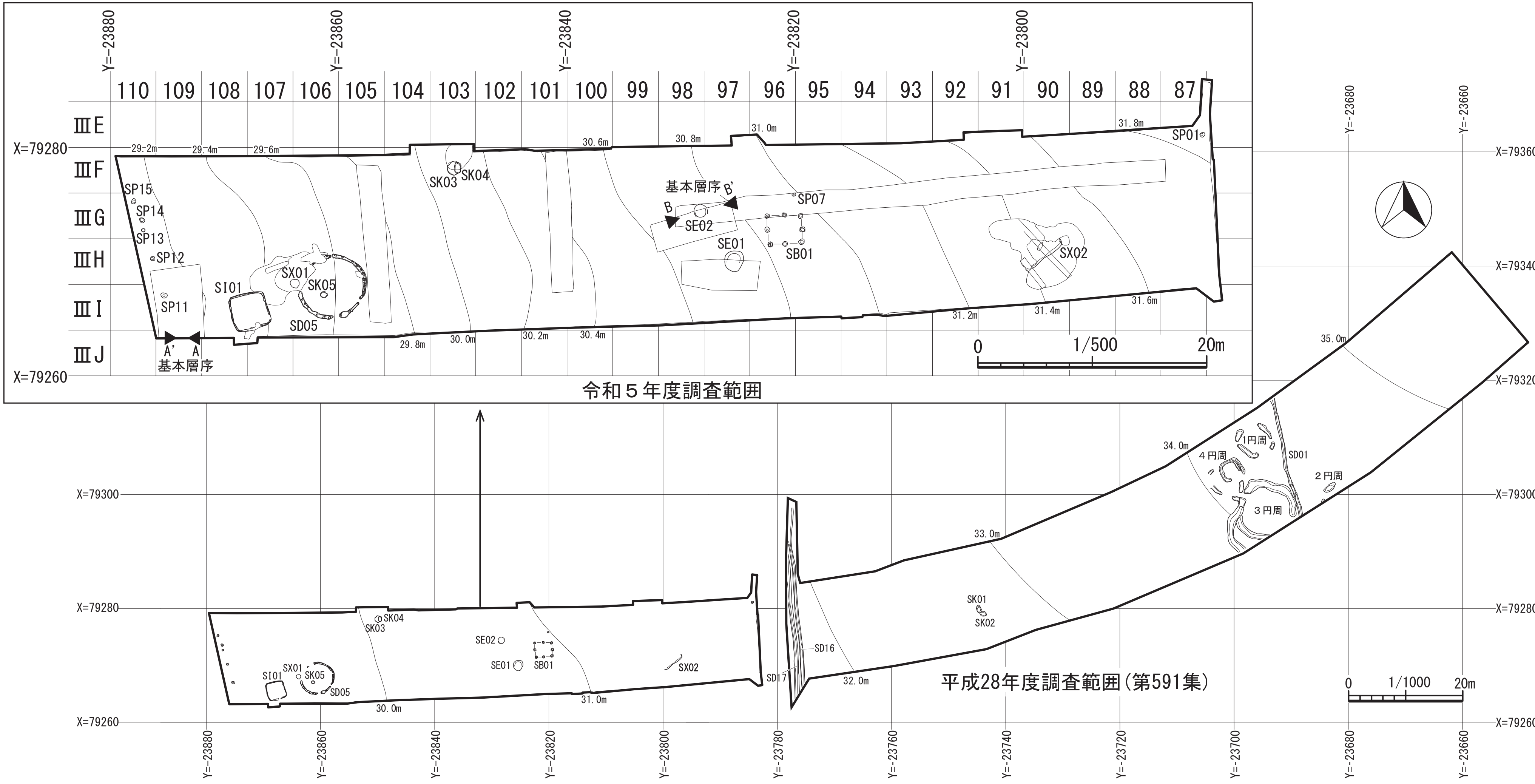

令和５年度調査範囲
平成28年度調査範囲(第591集)
1/500
0
20m
1/1000
0
20m
110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87
ⅢE
ⅢF
ⅢG
ⅢH
ⅢI
ⅢJ
X=79280
X=79260
X=79360
X=79340
X=79320
X=79300
Y=-23880
Y=-23860
Y=-23840
Y=-23820
Y=-23800
Y=-23780
Y=-23760
Y=-23740
Y=-23720
Y=-23700
Y=-23680
Y=-23660
基本層序
A'
A
B
B'
SP01
SP07
SP11
SP12
SP13
SP14
SP15
SX01
SX02
SK01
SK02
SK03
SK04
SK05
SI01
SD01
SD05
SD16
SD17
SE01
SE02
SB01
1円周
2円周
3円周
4円周
29.2m
29.4m
29.6m
29.8m
30.0m
30.2m
30.4m
30.6m
30.8m
31.0m
31.2m
31.4m
31.6m
31.8m
32.0m
33.0m
34.0m
35.0m

図4　遺構配置図

Ⅹ層　2.5Y7/3　 浅黄色土

粘土層。鉄分の沈着により部分的に明黄褐色（10YR6/8）を呈する。粘性は強く、しまりは中程度である。層厚は20～40㎝である。佐々木の⑦であり、十和田火山八戸火砕流堆積物に由来し、火砕流堆積物の２次堆積物である可能性が高いとされる。

Ⅺ層　7.5YR5/4　にぶい褐色土

粘土層。色調によりⅩ層と区別した。粘性・しまりともに中程度である。

第３節　縄文時代の遺構

１　土坑

第３号土坑（SK03、図５、写真５）

［位置・確認］調査区北西側のⅢＦ－103グリッドに位置する。標高30.0mのⅢ層面で検出した。

［重複・関連遺構］第４号土坑および倒木痕と重複しており、これらより古い。本遺構北半が倒木痕で壊されているほか、東端に入れ子状に第４号土坑が重複している。

［規模・形態］北半が倒木痕および第４号土坑によって壊されているが、平面形は不整な円形である。規模は開口部の長軸1.20m、短軸1.12m、底面の長軸1.25m、短軸0.95m、深さは0.27mである。底面が外側に張り出し、断面形は台形状である。

［底面］底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒色～黒褐色土主体で２層に分けられる。１層は褐色土との混土層で、人為堆積の可能性がある。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］いわゆるフラスコ状土坑で、貯蔵穴と考えられる。形状等から縄文時代と推測されるが、詳細な時期は不明である。

第４号土坑（SK04、図５、写真５）

［位置・確認］調査区北西側のⅢＦ－103グリッドに位置する。標高30.0mのⅢ層面で検出した。

［重複・関連遺構］第３号土坑と倒木痕と重複している。第３号土坑より新しく、倒木痕より古い。

［規模・形態］北東端半が倒木痕で壊されているが、平面形は楕円形である。規模は開口部の長軸0.94m、短軸0.57m、底面の長軸0.80m、短軸0.49m、深さは0.41mである。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形は逆台形状である。

［底面］底面はほぼ平坦である。

［堆積土］黒褐色～暗褐色土主体で２層に分けられる。１層は砂がわずかに混入する。２層は褐色土との混土層で、人為堆積の可能性がある。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。重複する倒木痕中出土の縄文時代晩期の土器（図11－19～25）が本遺構に伴っていた可能性がある。

［小結］形状等から縄文時代と推測されるが、詳細な時期は不明である。形状から土坑墓の可能性がある。

第５号土坑（SK05、図５、写真５）
［位置・確認］調査区南西側のⅢＩ－106グリッドに位置する。標高29.5ｍのⅣ層面で検出した。第５号円形周溝の内側に所在するが、堆積土の様相から円形周溝に伴わないと考えられる。
［重複・関連遺構］なし。
［規模・形態］平面形は不整円形である。規模は開口部の長軸0.68ｍ、短軸0.54ｍ、底面の長軸0.58ｍ、短軸0.43ｍ、深さは0.17ｍである。壁は底面から内湾しながら立ち上がり、断面形は鍋底状である。
［底面］底面は中央がくぼんでいる。
［堆積土］黒色～暗褐色～にぶい黄褐色土主体で３層に分けられる。１・２層はロームブロックや炭化物粒を含む。３層はローム主体層である。
［出土遺物］遺物は出土しなかった。
［小結］堆積土や形状等から縄文時代と推測されるが、詳細な時期は不明である。

第４節　平安時代の遺構

１　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（SI01、図６、写真５・６・12）
［位置・確認］調査区南西側のⅢＩ－107·108グリッドに位置する。標高29.2～29.4ｍのⅢ層面で確認した。
［重複］倒木痕と重複しており、南側壁面の一部が欠失している。
［規模・形態］平面形は隅丸方形である。規模は長軸3.27ｍ、短軸（3.23）ｍ、検出面からの深さは0.16ｍである。床面積は8.44㎡である。壁は底面から外傾して立ち上がり、断面形状は逆台形を呈する。主軸方向はカマドのある壁面に垂直な軸としたが（北東北古代集落遺跡研究会2014)、カマドがないため南壁で算出した。Ｎ－17.1°－Ｗである。
［床面・壁溝］床面は、粘土ブロック・ロームブロックを含む掘方埋土で、起伏がある。掘方底面には、掘削痕とみられる長軸0.14～1.07ｍ・短軸0.08～0.70ｍ・深さ0.02～0.14ｍの円形～楕円状の凹みが認められる。壁溝がほぼ全周に巡る。幅0.08～0.13ｍ　深さ0.19～0.33ｍである。
［柱穴］検出されなかった。
［カマド］検出されなかった。
［堆積土］黒色～黒褐色土主体で７層に分けられる。５層は壁溝堆積土、６・７層は掘方埋土である。１層中に火山灰の多量の混入が認められたため分析を行っている（第４章第３節)。
［出土遺物］堆積土から土師器片が１点（8.3ｇ）出土した（図６－１)。甕の胴部片である。器面調整は、外面は縦位方向のケズリ、内面は横位方向のナデで、焼成はやや硬質である。胎土中に３㎜程度の小礫を含む。断面が赤化しており、被熱の可能性がある。
［自然科学分析］１層中の火山灰を分析したところ、白頭山－苫小牧テフラ起源の粒子が主体で、その他にも十和田aテフラや十和田八戸テフラないしそれより古いテフラ起源の鉱物粒子が混入したものと推定された（第４章第３節)。
［小結］カマドが検出されなかったことから住居的建物ではなく、何らかの作業場的な建物跡の可能

性も考えられる。出土土師器や火山灰の堆積から、白頭山－苫小牧テフラ降下以前の平安時代、10世紀中葉には廃絶していたものと思われる。

２　円形周溝

第５号円形周溝（SD05、図７、写真７）

[位置・確認] 調査区南西側のⅢH･Ｉ－105･106グリッドに位置する。標高29.5～29.6mのⅢ～Ⅳ層面で確認した。周辺は耕作等により削平されており、確認できたのは底面の一部と掘方である。

[重複・関連遺構] 倒木痕と重複しており、西～北側の一部が欠失している。西側の倒木痕中から第１号性格不明遺構が検出されている。周溝の内側に第５号土坑が所在するが、堆積土の様相から時代が異なると考えられる。

[規模・形態] 周溝は所々で約0.08～1.04m途切れる箇所があるが、平面形は円形基調である。周溝外縁の直径は約６m（長軸6.12m、短軸5.83m）で、内縁の直径は約５m（長軸5.41m、短軸5.02m）である。周溝の幅は0.19～0.53m、深さ0.06～0.30mである。周溝の壁は外傾して立ち上がり、断面形状は逆台形である。

[底面] 底面は起伏があり、更に長軸0.11～0.29m・短軸0.05～0.13m・深さ0.02～0.09mの円形～楕円状の凹みが認められる。掘方の掘削痕とみられ、東側で顕著である。

[堆積土] 黒色土主体で２層に分けられる。火山灰の堆積・混入は確認できなかった。１層は自然堆積土と思われる。２層は黄褐色土との混土層で、掘方埋土である。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[自然科学分析] 溝内出土の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、７世紀後葉～８世紀後葉の年代（較正暦年代）の分析結果が得られた（第４章第１節参照)。古木効果を考慮する必要がある。

[小結] 遺構の形状・周辺遺構の配置状況等から平安時代の円形周溝（墓）と思われるが、詳細な時期は不明である。

３　性格不明遺構

第１号性格不明遺構（SX01、図７、写真８・12)

[位置・確認] 調査区南西側のⅢH･Ｉ－106･107グリッドに位置する。標高約29.5mの倒木痕中で確認した。

[重複・関連遺構] 第５号円形周溝より新しい倒木痕中に構築されている。

[規模・形態] 平面形は円形である。規模は開口部長軸0.83m、短軸0.76m、検出面からの深さは0.15mである。断面形状は鍋底状である。

[底面] 倒木痕堆積土を底面としており、倒木痕の凹地を利用した可能性が高い。

[堆積土] 黒褐色土主体の単層である。ロームブロックや炭化物を含む。堆積土中から完形の土師器坏が出土しており、人為堆積の可能性が高い。

[出土遺物] 完形の土師器坏１点（242.2ｇ、図７－１）が堆積土上位（検出面）から正位で出土した。口縁部の一部が欠損しているものの、ほぼ完形である。ロクロ整形で器面無調整、底部は回転糸切り

である。法量は口縁部径13.4㎝・底径6.7㎝・器高5.3㎝で、胴部は底部から外に膨らむように内湾しながら立ち上がり、口唇部付近で外反する。胎土に径５㎜程の小礫を含み、焼成は硬質である。器面の一部が赤化しており、被熱により変色した可能性がある。底面に「大」字が刻書されている。刻線の幅は約１㎜で、深さ１㎜未満で、焼成前に断面半円状工具によって施されている。施文順は、―（横棒：右から左）→ノ（左下方向の斜線：左下から右上）で、筆順としては方向が逆である。＼（右下方向の斜線：左上から右下）は他の線との重複がないため新旧関係は不明である。年代は平安時代の９世紀後半～10世紀前半のものと思われる。

［自然科学分析］堆積土中の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、７世紀後葉～９世紀前葉の年代（較正暦年代）の分析結果が得られた（第４章第１節参照）。古木効果を考慮する必要がある。

［小結］出土土師器から、平安時代の９世紀後半～10世紀前半と思われる。第５号円形周溝より新しいと推測される。

第５節　近世以降の遺構

１　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（SB01、図８、写真９）

［位置・確認］調査区ほぼ中央のⅢG･H－95･96グリッドに位置する。標高30.8～30.9mのⅢ層面で確認した。

［重複・関連遺構］なし。

［規模・形態］SP02・03・04・05・06・08・09・10の８基の柱穴で構成される梁行２間・桁行２間の東西棟の建物である。規模は北辺長軸2.95m、南辺長軸2.80m、西辺短軸2.25m、東辺短軸2.29mで、主軸方向は北辺でＮ－89.0°－Ｅ、南辺でＮ－86.0°－Ｅである。柱間寸法は梁行1.09 ～1.29m・桁行1.35 ～1.55mで、柱筋は比較的揃っている。

［堆積土］柱穴掘方の堆積土は黒色～黒褐色土主体で１～３層に分けられる。ローム粒や粘土ブロックを含む。壁際の掘方埋土には黄橙色～浅黄橙色の粘土質シルトもしくは粘土が堆積するものがある。SP02・04・08・09の１層、SP10の２層は柱痕跡と思われる。

［柱穴］柱穴掘方の平面形は方形～円形～不整円形で、長軸0.45～0.56m・短軸0.38～0.52m・深さ0.24～0.56mである。SP02・04・08は底面に柱当たりが確認された。柱当たりは、長軸0.14～0.17m・短軸0.13～0.14mのほぼ円形である。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］建物跡の性格は不明である。柱穴から遺物は出土していないため詳細な時期は不明であるが、周辺から近世陶器・磁器が出土しており、近世と推測される。

２　柱穴（SP、図８）

配置等から掘立柱建物跡や柵・柱列とならない柱穴７基（SP01・07・11～15）をまとめた。SP01は標高31.8mのⅡ層面、SP07は標高30.9mのⅢ層面、SP11～15は標高29.1mのⅢ層面で確認した。SP11～15は調査区西端のⅢＧ～Ｉ－109・110に５基が南北方向に並んでおり、何らかの施設になる

可能性があるが詳細は不明である。柱穴掘方の平面形は円形で、長軸0.32～0.58m・短軸0.26～0.45m・深さ0.21～0.42mである。堆積土は黒色～黒褐色土主体の単層である。遺物の出土はなく、遺構の詳細な時期や性格は不明である。

　各柱穴の詳細は表２にまとめた。

第６節　時期不明の遺構

１　井戸跡

第１号井戸跡（SE01、図９、写真10）

［位置・確認］調査区ほぼ中央のⅢH－97グリッドに位置する。標高30.7mのⅢ層面で確認したが、精査はⅣ層面で行った。

［重複・関連遺構］なし。

［規模・形態］平面形は円形である。開口部径は約1.7mと推定される。安全のため、調査面から約1.4mの深度で調査を終了した。断面形状は確認できた範囲では概ね袋状である。

［堆積土］調査できた範囲では５層に分けられる。黒色・灰黄色・浅黄色・にぶい黄色土主体で、黄褐色やにぶい黄褐色土のブロックが混入することから、人為堆積と考えられる。

［出土遺物］堆積土上位からビニールが出土したが、それ以外の遺物は出土しなかった。

［小結］開口部形状や規模・深度から井戸跡と推定した。堆積土中のビニールの出土から、廃絶・埋め戻しは現代と推定されるが、それ以外の時期が分かる遺物が出土していないため、構築年代は不明である。

第２号井戸跡（SE02、図９、写真10・11）

［位置・確認］調査区ほぼ中央のⅢG－97･98グリッドに位置する。標高30.7mのⅣ層面（試掘トレンチ中）で確認した。

［重複・関連遺構］なし。

［規模・形態］平面形は円形である。開口部径は約1.2mと推定される。湧水や作業の安全確保のため、調査面から約1.8mの深度で調査を終了した。断面形状は確認できた範囲では概ね筒状である。

［堆積土］調査できた範囲では８層に分けられる。黒褐色・暗褐色・灰黄褐色・灰黄色土主体で、黄褐色土や灰黄褐色土のブロックが混入し、人為堆積と考えられる。８層は掘方埋土である。

［出土遺物］堆積土上位からビニールが出土した。約１m掘り下げたところで井戸枠を確認した。井戸枠は木桶が用いられており、調査できた範囲では上下２段確認された。上方１段目の桶は幅0.15m程の20枚の側板で構成されていた。側板の残存長は最大で約１mであるが、上部は腐食により欠損していると考えられる。桶の径は約0.9mであるが、開口部側が小さく、底部側が大きいため、おそらく逆位で重ねられたものと推定される。外面の下部に箍（たが）が嵌められていた。部材は現場で抜き取りはできたが、腐食が激しく保存処理に耐えられないと判断し、自然科学分析サンプルの採取のみに止めた。下方２段目の桶は全ての部材の抜き取りはできなかったので、側板の長さは不明であるが、側板の１枚を抜き取り、自然科学分析サンプルを採取した。抜き取りの際に、接合面にダボが用いられていることと、外面に箍が嵌められていたことを確認した（写真11）。調査できた範囲では、底板の痕

跡は確認されなかった。

［自然科学分析］桶材（側板・箍・ダボ）の樹種同定及び放射性炭素年代測定を行ったところ、側板はマツ属複維管束亜属、箍とダボはタケ亜科と同定された（第４章第２節）。また、17世紀中葉～19世紀後葉の間に４つの範囲と20世紀前葉以降の年代（較正暦年代）が示された（第４章第１節）。

［小結］開口部形状や規模・深度から井戸跡と推定した。構築時期は近世以降の可能性があるが時期を特定できない。検出時にはコンクリート製の井戸枠が残存しており、現代まで改修して使用されたものと推定される。

２　性格不明遺構

第２号性格不明遺構（SX02、図10、写真11）

［位置・確認］調査区東南側のⅢH－90グリッドに位置する。標高約31.4mのⅢ層面で確認した。

［重複］倒木痕および撹乱と重複する。南東～北側の倒木痕より新しく、西側の倒木痕より古い。

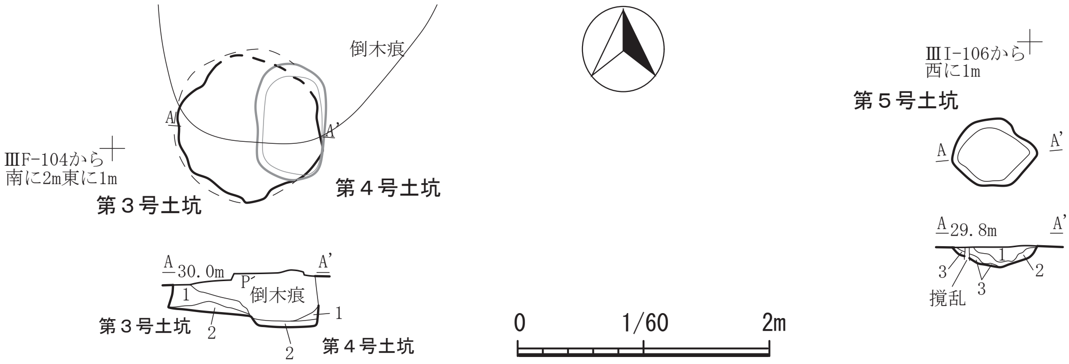
［規模・形態］平面形は隅丸方形と推測される。規模は開口部長軸3.90m、短軸（0.59）m、検出面からの深さは最大0.19mである。断面形状は概ね箱形である。

［底面］底面はほぼ平坦である。

［堆積土］５層に分けられる。

［出土遺物］遺物は出土しなかった。

［小結］時期・性格ともに不明である。



第３号土坑（SK03）

第１層	10YR3/1	黒褐色土	粘性・しまり弱 褐色土（10YR4/4）との混土層
第２層	10YR2/1	黒色土	粘性やや弱・しまり弱

第４号土坑（SK04）

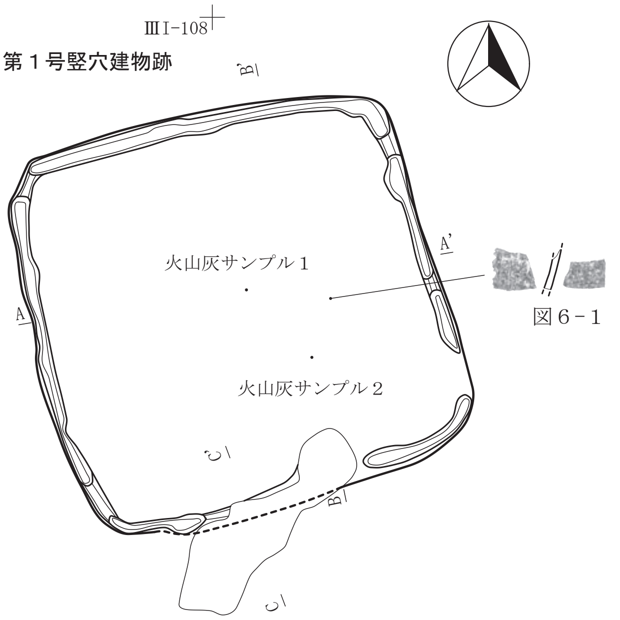
第１層	10YR3/3	暗褐色土	粘性中・しまり弱 砂わずかに混じる
第２層	10YR3/1	黒褐色土	粘性・しまり弱 褐色土（10YR4/4）との混土層

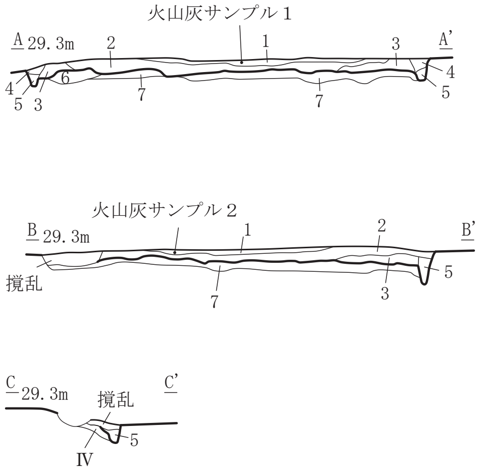
第５号土坑（SK05）

第１層	10YR2/1	黒色土	粘性・しまり弱 φ１～10㎜ロームブロック１%
第２層	10YR3/3	暗褐色土	粘性・しまり弱 φ１～５㎜ロームブロック１% φ１～10㎜炭化物１%
第３層	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性・しまり弱 地山由来

図５　土坑

第１号竪穴建物跡

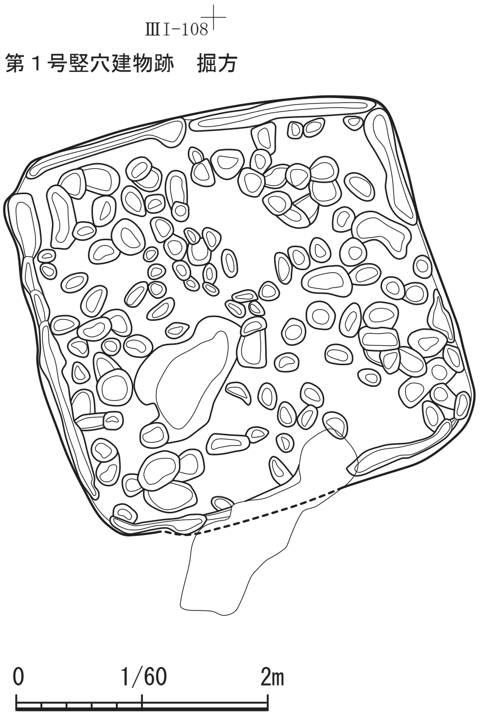




第１号竪穴建物跡（SI01）

第１層	10YR2/1	黒色土	粘性弱・しまりやや弱	にぶい黄褐色（10YR5/4）火山灰を多量に含む
第２層	10YR2/1	黒色土	粘性・しまり弱	φ１～10㎜ロームブロック５％
第３層	10YR2/2	黒褐色土	粘性弱・しまりやや弱	にぶい黄褐色（10YR5/4）ロームブロック多量に含む　壁際の堆積土
第４層	10YR2/1	黒色土	粘性・しまり弱	壁溝内堆積土　建物埋没後も壁板残存か？
第５層	10YR2/1	黒色土	粘性・しまり弱	にぶい黄褐色（10YR5/4）ローム土混じる　壁溝内堆積土
第６層	10YR1.7/1	黒色土	粘性弱・しまり中	黄褐色土（10YR5/6）塊含む　床面の一部もしくはカマド構築材を含む可能性
第７層	10YR1.7/1	黒色土	粘性弱・しまり中	灰黄褐色（10YR4/2）粘土ブロック・黄褐色（10YR5/6）ロームブロック含む　貼床層（掘方埋土）

第１号竪穴建物跡　掘方



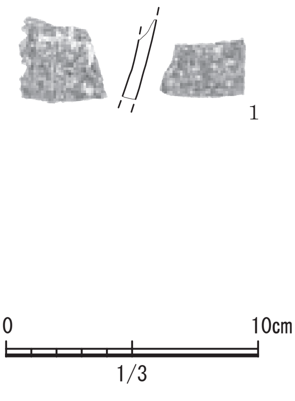
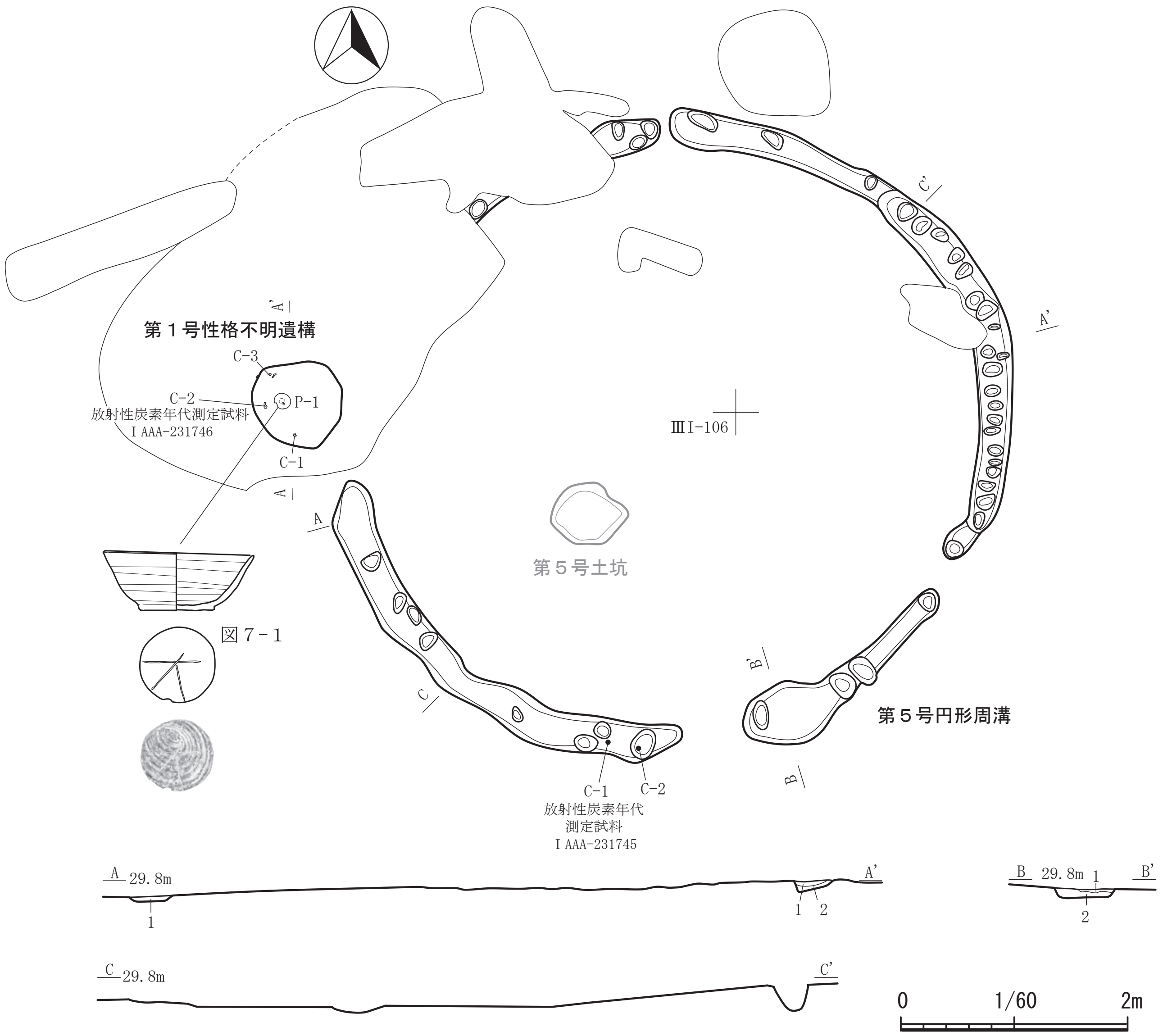
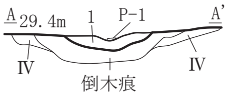


図６　竪穴建物跡



第５号円形周溝（SD05）
第１層　10YR2/1　黒色土　　粘性・しまり弱　　自然堆積土
第２層　10YR2/1　黒色土　　粘性弱・しまり中　黄褐色土（10YR5/6）との混土層



第１号性格不明遺構

第１号性格不明遺構（SX01）
第１層　10YR2/2　黒褐色土　粘性・しまり弱　φ1～10㎜ロームブロック 1%
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　φ1～50㎜炭化物 10%

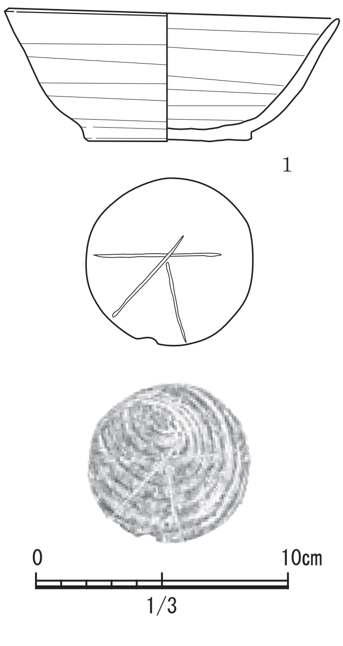
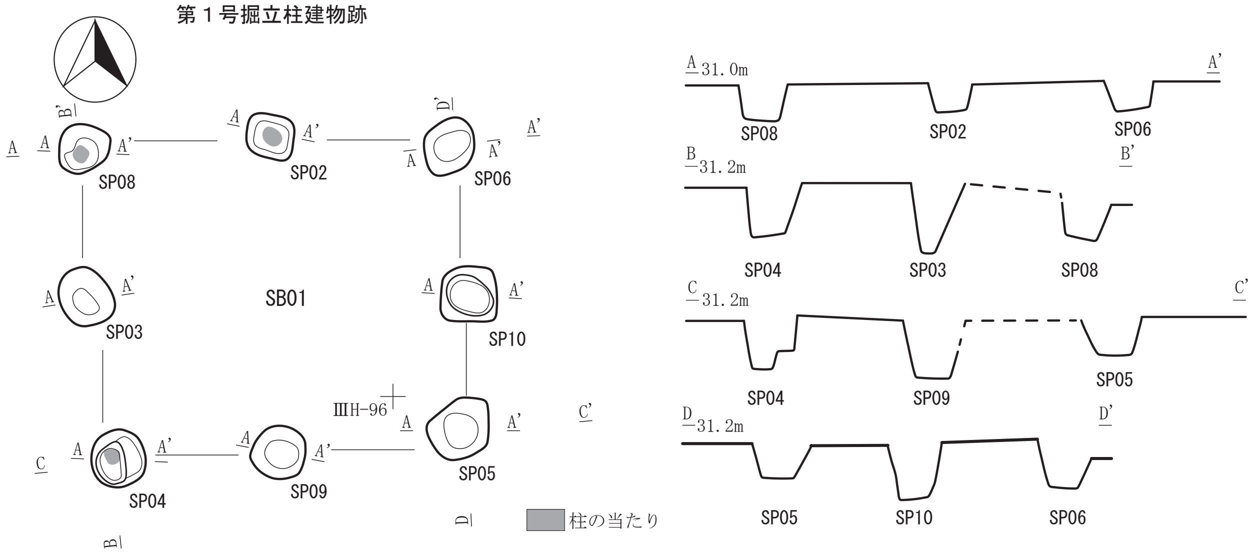
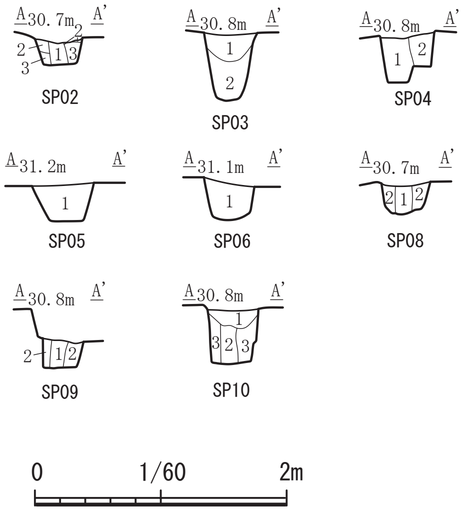


図7　円形周溝・性格不明遺構（１）

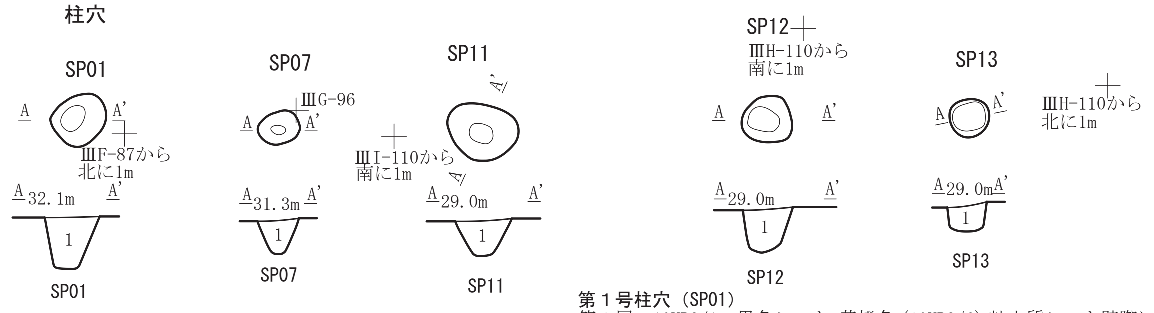
第１号掘立柱建物跡

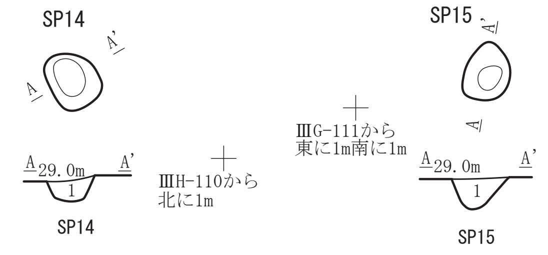




第１号掘立柱建物跡（SB01）
SP02
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　密度粗　柱痕
第２層　10YR2/2　黒褐色シルト　ローム粒（φ～30㎜）７％ 掘方埋土
第３層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄橙色（10YR8/6）粘土質シルトとの混合　掘方埋土
SP03
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　　　黄橙色（10YR5/6）ローム粒（φ～20㎜）20％
第２層　10YR8/6　黄橙色粘土質シルト　黒褐色（10YR2/2）シルト30％
SP04
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色（10YR5/6）ローム粒（φ～50㎜）５％　密度粗　柱痕
第２層　10YR2/2　黒褐色シルト　黄褐色（10YR5/6）ローム粒（φ～20㎜）20％　密度密　掘方埋土
SP05
第１層　10YR2/1　黒色シルト　　明黄褐色（10YR6/6）ロームブロック（φ～50㎜）壁際中心に10％
SP06
第１層　10YR2/1　黒色シルト　　浅黄橙色（10YR8/3）粘土ブロック（φ～30㎜）20％　埋め戻し
SP08
第１層　10YR2/1　黒色シルト　　褐色（10YR4/4）シルト30％ 密度粗　柱痕
第２層　10YR7/4　にぶい黄橙色粘土質シルト　浅黄橙色（10YR8/3）粘土質シルト
浅黄橙色（10YR8/3）粘土ブロック（φ～50㎜）10％　掘方埋土
SP09
第１層　10YR2/1　黒色シルト　　ローム粒（φ～５㎜）２％　柱痕
第２層　10YR3/2　黒褐色シルト　浅黄橙色（10YR8/3）粘土ブロック（φ～40㎜）20％　掘方埋土
SP10
第１層　10YR3/2　黒褐色シルト　浅黄橙色（10YR8/3）粘土粒（φ～20㎜）10％
第２層　10YR2/1　黒色シルト　　浅黄橙色（10YR8/3）粘土粒（φ～10㎜）５％　柱痕
第３層　10YR8/3　浅黄橙色粘土ブロック（φ～50㎜）　黒褐色（10YR3/2）シルト30％　掘方埋土

柱穴





第１号柱穴（SP01）
第１層　10YR2/1　黒色シルト　黄橙色（10YR8/6）粘土質シルト壁際に５％

第７号柱穴（SP07）
第１層　10YR2/1　黒色シルト　ローム粒（φ～10㎜）５％　下部掘り過ぎ

第11号柱穴（SP11）
第１層　10YR2/1　黒色シルト　ローム粒（φ～2㎜）１％

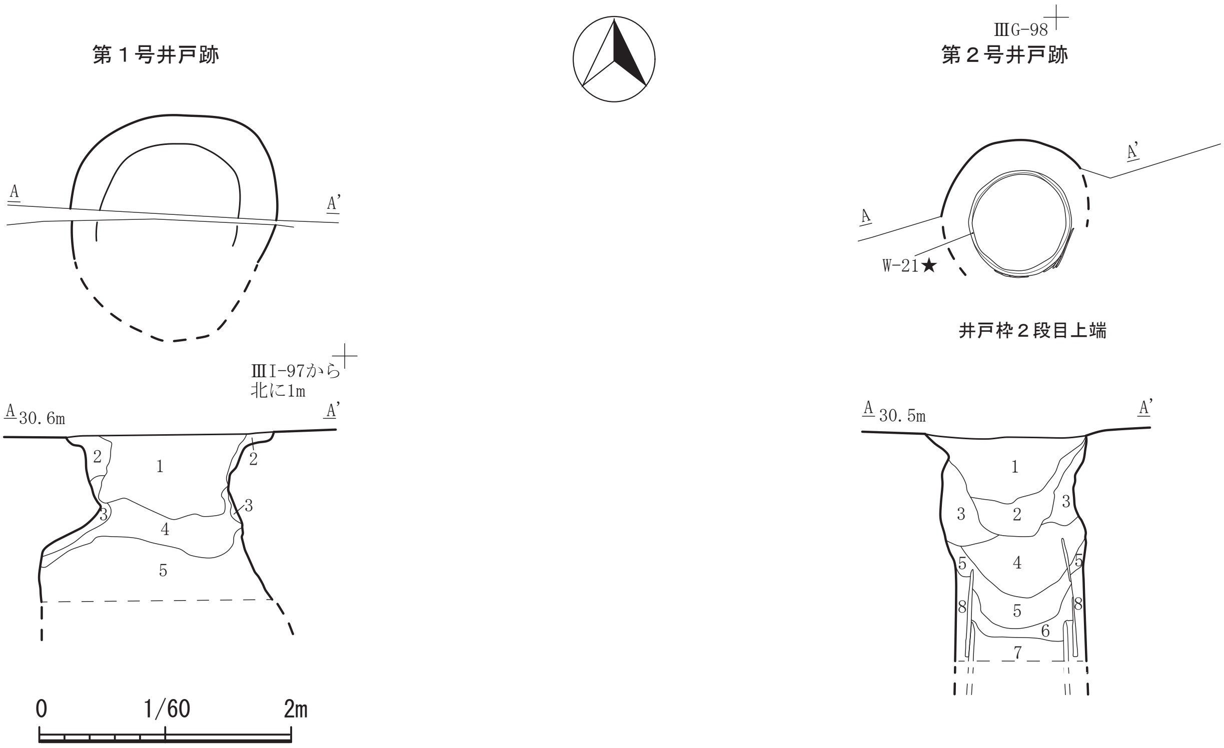
第12号柱穴（SP12）
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　ローム粒（φ～30㎜）20％　底部ほど多い

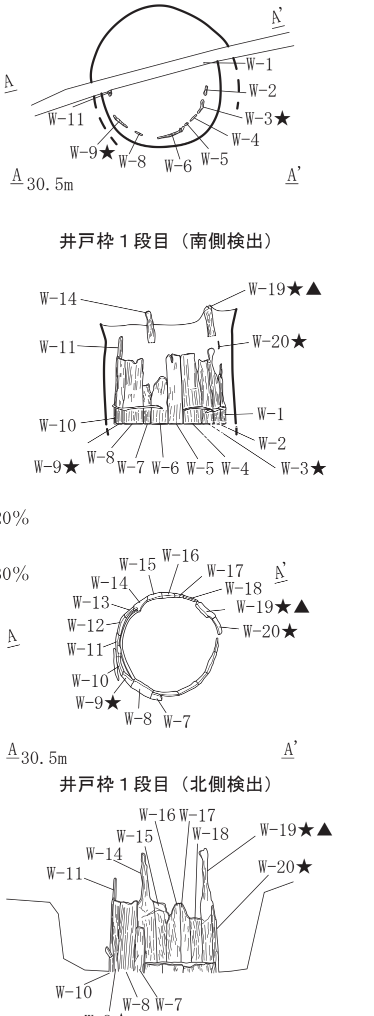
第13号柱穴（SP13）
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　ローム粒（φ～10㎜）10％

第14号柱穴（SP14）
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　ローム粒（φ～30㎜）40％

第15号柱穴（SP15）
第１層　10YR2/2　黒褐色シルト　ローム粒（φ～10㎜）下層に５％

図８　掘立柱建物跡・柱穴





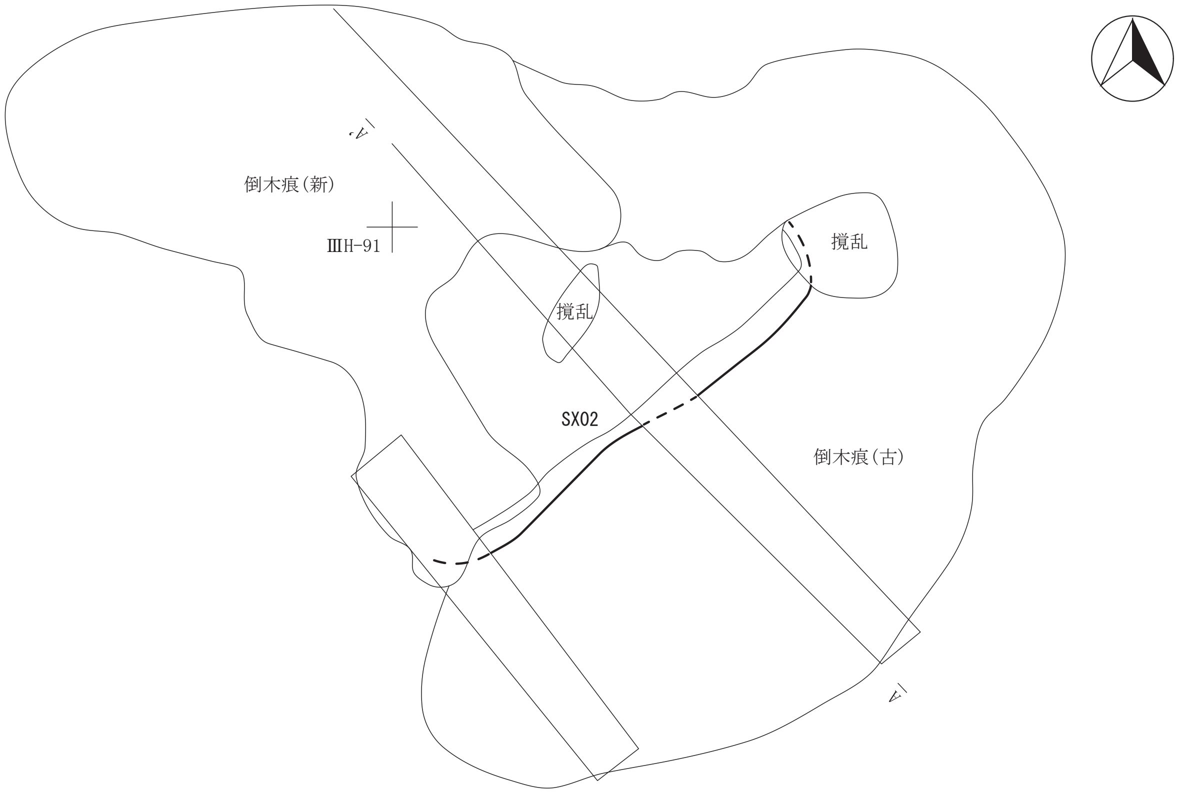
第１号井戸跡（SE01）
第１層　2.5Y6/3　にぶい黄色土　粘性中・しまり弱
　地山由来の粘土層 一部粘質・硬質
　一部鉄分により黄褐色（2.5Y5/6）を呈する
第２層　10YR2/1　黒色土　粘性・しまり弱
　φ1～50㎜にぶい黄褐色ブロック
　・φ1～20㎜黒褐色土ブロック 20%
第３層　2.5Y7/3　浅黄色土　粘性中・しまりやや弱
　褐灰色土（10YR4/1）との混土層 一部ブロック状
第４層　10YR2/1　黒色土　粘性中・しまりやや弱
　φ1～100㎜にぶい黄色土（2.5Y6/3）ブロック 20%
　φ1～100㎜黄褐色土（10YR5/6）ブロック 20%
第５層　2.5Y7/2　灰黄色土　粘性強・しまり中
　粘土層
　一部黄褐色土（10YR5/6）・褐色土（10YR4/6）混入

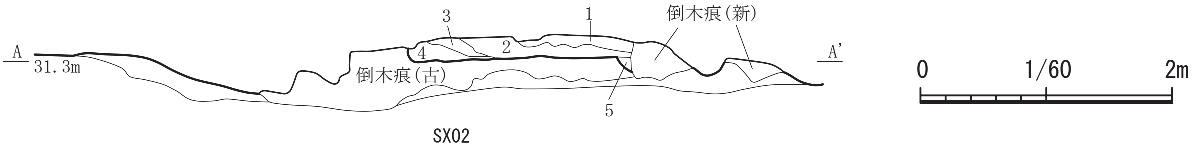
第２号井戸跡（SE02）
第１層　10YR3/3　暗褐色土　粘性・しまり弱
　φ1～20㎜黄褐色土（10YR5/6）ブロック 30%
　φ1～20㎜灰黄色土（2.5Y6/2）ブロック 10%
　生木・ビニール袋混入
第２層　10YR4/2　灰黄褐色土　粘性中弱・しまりやや弱
　φ1～30㎜黄褐色土ブロック 30%
　φ1～50㎜灰黄色土ブロック 30%
第３層　10YR3/1　黒褐色土　粘性・しまり弱
　φ1～20㎜にぶい黄橙色（10YR6/4）～黄褐色土（10YR5/6）ブロック 20%
　φ1～50㎜灰黄色土（2.5Y6/2）ブロック 10%
第４層　10YR3/2　黒褐色土　粘性弱・しまりやや弱
　φ1～50㎜にぶい黄橙色（10YR6/4）～黄褐色土（10YR5/6）ブロック 30%
　φ1～50㎜灰黄色土ブロック 30%
　φ1～50㎜黒色土ブロック 10%
第５層　2.5Y6/2　灰黄色土　～暗灰黄色土（2.5Y5/2）
　粘性中・しまりやや弱
　粘土層　一部硬質
※第６層以下は崩落のため注記できなかった。

	樹種同定(★)	放射性炭素年代測定(▲)
W-3	No.1	
W-9	No.2	
W-19	No.3	I AAA-231747
W-20	No.4	
W-21	No.5	
W-21（ダボ）	No.6	
井戸枠２段目箍	No.7	

図９　井戸跡

第２号性格不明遺構





第２号性格不明遺構（SX02）

第１層	10YR2/2	黒褐色シルト	灰白色 10YR8/2 粘土ブロック（φ～ 50 ㎜）５％
第２層	10YR5/2	灰黄褐色粘土質シルト	灰白色 10YR8/2 粘土粒（φ～ 10 ㎜）30％
第３層	10YR7/3	にぶい黄橙色粘土質シルト	黒褐色 10YR3/2 シルト 30％
第４層	10YR8/4	浅黄橙色粘土質シルト	灰白色 10YR8/1 粘土ブロック（φ～ 80 ㎜）40％
第５層	10YR5/2	灰黄褐色粘土質シルト	

図10　性格不明遺構（２）

第７節　遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・石器・土製品（焼成粘土塊）が段ボール箱で２箱出土した。縄文土器・石器は縄文時代、土師器・須恵器・土製品は平安時代、陶器・磁器は近世以降の時期が考えられる。特に集中して出土したものはなく、また、全体の器形が分かるまで復元できたものはない。各時代を通して散漫な出土を示すが、時代毎に出土分布が異なる特徴がある。

１　**縄文土器**（図11-１～25、写真12）

縄文土器は全て遺構外の出土である。804.6ｇ出土し、うち25点（618.0ｇ）を図示した。前期・後期・晩期のものがある。

（１）前期の土器

461.6ｇ出土した。調査区東側に出土分布が偏る。うち16点（319.8ｇ）を図示した（図11-１～16）。全て深鉢である。１・４・10・11・12は口縁部、５は頸部、２・６・７・８・13・14・16は胴部、３・９・15は底部である。全体の器形が分かるまで復元されたものはないが、円筒状の深鉢と推定される。外面は脆く粉っぽく、摩耗しているものもある。内面はミガキと思われる調整で平滑にされている。胎土には繊維の混入がみられるものが多い。焼成は良好であるが、やや軟質である。出土グリッドや文様・胎土等から、１～３、４～９、10～12は同一個体と推測される。２・３は外面に単軸絡条体第１類が縦位に施されたものである。胎土中に混入する透明な粒子が目立つ。焼成は良好で、器面は浅黄橙色をしている。４は口縁部に縄の側面圧痕を横位に施したものである。４・５の頸部には結節回転文が施されている。７・８の胴部は単軸絡条体第１類を縦位に施していると思われるが、器面が摩滅しているため判然としない。胎土中に白色の骨針状物質の混入が目立つ。焼成は良好であるが砂っぽい。器面はにぶい褐色をしている。10は口縁部に縄の側面圧痕を横位に施したもの、11は単軸絡条体第１類の側面圧痕と思われる。12は口縁部のボタン状の貼付である。胎土に混入する白色粒子が目立つ。焼成はやや不良で、器面は脆く、砂っぽい。器面は橙色をしている。13・14は胴部片で、14は斜縄文、13は器面の摩滅が激しいものである。15は底部、16は底部付近の胴部で、どちらも無文である。

これらはいずれも縄文時代前期後葉の円筒下層ｄ式に比定される。

（２）後期の土器

後期の土器は２点（13.8ｇ）出土し、いずれも図示した（17・18）。調査区北東側からの出土である。ともに甕の胴部片と思われ、器面に弧状や直線的な沈線が施される。胎土に砂粒を含み、焼成は良好でやや硬質である。

『青森県史　資料編　考古２　縄文後期・晩期』（青森県2013）の後期３期（後期前葉「十腰内Ⅰ群」併行）に比定される。

（３）晩期の土器

329.2ｇ出土した。調査区北西の特定のグリッドでの出土である。うち７点（284.4ｇ）を図示した（19～25）。台付鉢（19～22）および鉢（23～25）と思われるものである。台付鉢および鉢は、出土グリッドや文様・胎土等から、それぞれが同一個体と推測される。

台付鉢は口縁部（19・20）、胴部（21）、胴～脚部（22）である。19は山形突起を有する口縁部で、口唇部は丸く、突起の頂上の脇に箆状工具による１対の刻みが施されている。20は平口縁で、口唇部

は平坦である。器形は、頸部がくびれ口縁部が外傾するものと推測される。脚部は端部が内側に捲れている。外面文様は口縁部～頸部に施され、口縁部に沿って斜位もしくは平行沈線が、頸部には３～４条の沈線が施されている。胴部には細い原体による地文が施される。脚部は無文であるが、内底面には細い三日月状の痕跡があり、脚部接合時に付いた爪痕と思われる。胎土に褐色の粒子を含む。焼成は良好であるがやや軟質である。22の内面は径３㎜程の小円状の剥離がみられ、被熱によると推測される。

鉢は口縁部（23・24）と胴部片（25）である。23は平口縁で、刻みが施されている。器面には三叉状と思われる沈線が施されている。胴部は斜縄文が施されていると思われるが、小片のため詳細は不明である。胎土に砂粒を含む。焼成は良好でやや硬質である。

これらは『青森県史　資料編　考古２　縄文後期・晩期』（青森県2013）の晩期１ｂ期（晩期前葉「大洞Ｂ２式」併行）に比定される。いずれも本来は第４号土坑に伴っていたが、倒木痕によって土坑から巻き上げられたものである可能性が高い。

２　土師器（図11－26～32、写真12）

111.2ｇ出土し、うち７点（84.2ｇ）を図示した。いずれも小片で、器種は坏（26）と甕（27～31）・壺もしくは鉢（32）である。

26は坏の底部である。ロクロ整形無調整、底部は回転糸切りのものであるが、器面はかなり摩耗している。

甕は、27は肩部、28～31は胴部である。口縁部・底部は出土しなかった。30は底部付近である。いずれも小片であり器形は判然としない。器面は、外面は縦～斜位方向のケズリもしくはナデ、内面は横～斜位方向のナデが多い。胎土中に３㎜程度の小礫を含み、焼成はやや硬質である。29は器面が灰白色でやや脆いものである。高温もしくは長時間にわたり熱を受けていた可能性がある。31は焼成が他とは異なっており、土師器ではない可能性もあるがここに含めた。

32は壺もしくは鉢の底部付近である。ロクロ整形である。

いずれも年代は平安時代の９世紀後半～10世紀前半のものと思われる。

３　須恵器（図11－33～38、写真12）

６点（83.7ｇ）出土し、全てを図示した。器種は坏（33）・壺（34・35）・甕（36～38）である。

33は坏の胴部片で、内外面はロクロ整形である。

34・35は壺の肩部片で、こちらも内外面はロクロ整形のものである。34は外面に自然釉が付着している。35は鉢の可能性もある。

36～38は甕で、36・37は肩部片、38は胴部下半片である。外面はタタキ痕が顕著であるが、内面の当て具痕は明瞭でない。36は酸化炎焼成のものである。

これらはいずれも五所川原産と推定されるが、口縁部が出土しなかったため時期の特定は難しい。五所川原窯跡群の操業時期である９世紀後葉～10世紀第３四半期頃の年代を想定しておく（五所川原市教育委員会2003）。

４　磁器（図12－１～４、写真12）

近世の磁器は４点（48.7ｇ）出土し、全てを図示した。碗（１～３）と袋物（４）である。

碗は、１が口縁部、２・３が底部である。外面に圏線が施される。１の外面には線描が施されていると思われるが、小片のため文様は不明である。２は見込みには松と思われる文様が、外底面には「太明年製」の裏銘が施されている。

４の袋物は徳利と考えられる。胴部で、松葉と推定される文様が線描される。

いずれも年代は肥前Ⅳ期（1690～1780年代）と推定される（大橋1993・九州近世陶磁学会2000）。

なお、産地及び時期不明の陶器擂鉢や袋物・近代以降の磁器碗も出土しているが図示しなかった。

５　石器（図12－５～７、写真12）

磨製石斧１点・磨石１点、凹石１点の３点（925.9ｇ）が出土した。

５は磨製石斧である。基部が刃部より窄まる撥型の形状である。刃部および基部形状は円く、断面は扁平で、刃部断面は両刃である。表面はよく研磨されているが、基部付近には整形時の敲打痕が認められる。一部ガジリ痕がみられる。石材は流紋岩である。

６は磨石である。上半は破損した扁平礫の両側縁と端部に平坦・平滑な磨り面がみられる。切断面の観察や器面の赤化から、被熱により破損したものと推測される。石材は流紋岩である。

７は凹石である。おにぎり状の三角形の礫の両面と側面に径1.5㎝程の凹みが１～３か所認められる。石材はデイサイトである。

６　土製品（図12－８、写真12）

焼成粘土塊が１点（1.6ｇ）出土した。器面に半円筒状の凹みと赤化が認められる。胎土中に３㎜程度の小礫を含む。半円筒状の凹みはスサ痕、赤化は被熱によるものである可能性があり、その場合、炉壁片の可能性もある。

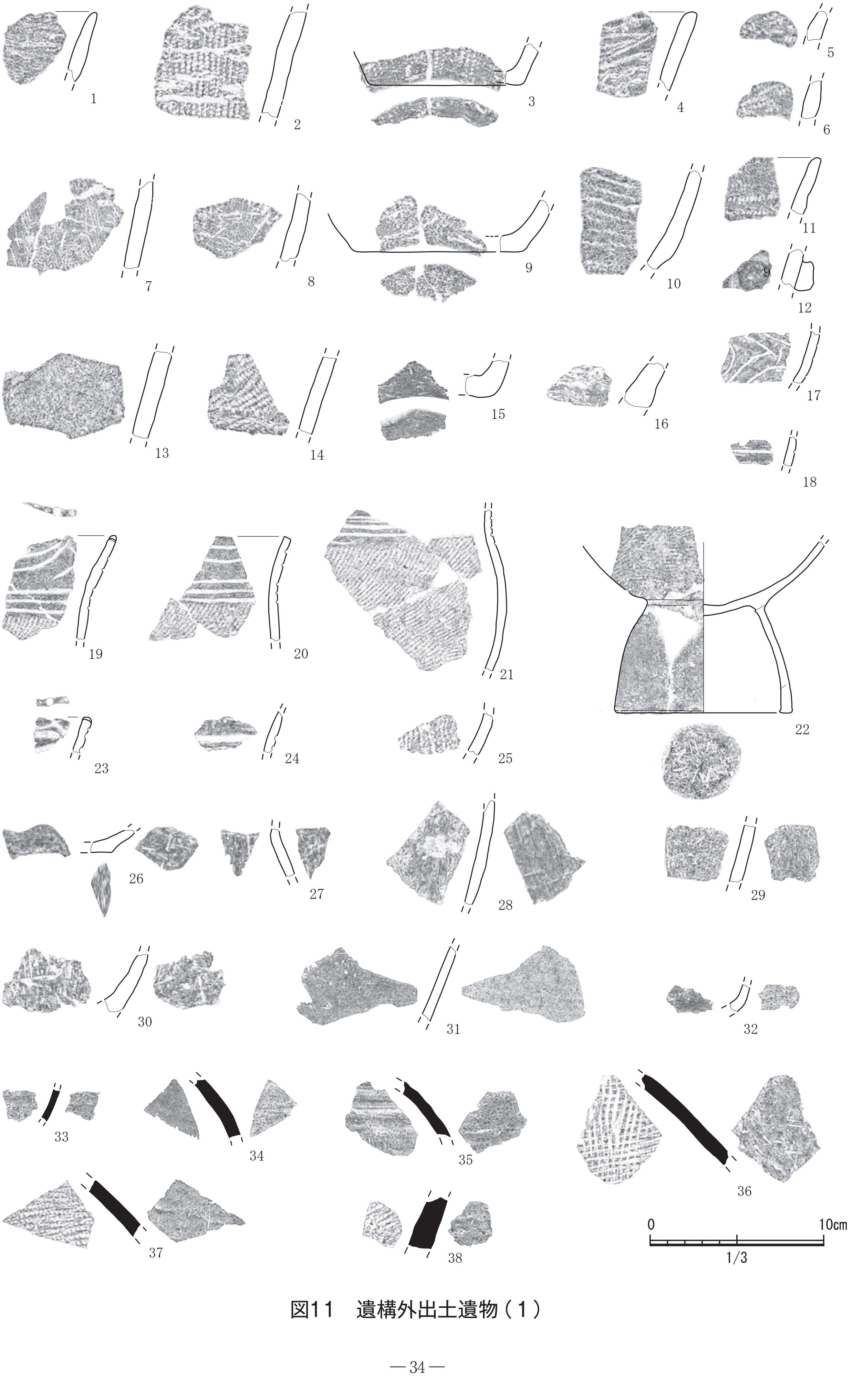


図11　遺構外出土遺物（1）

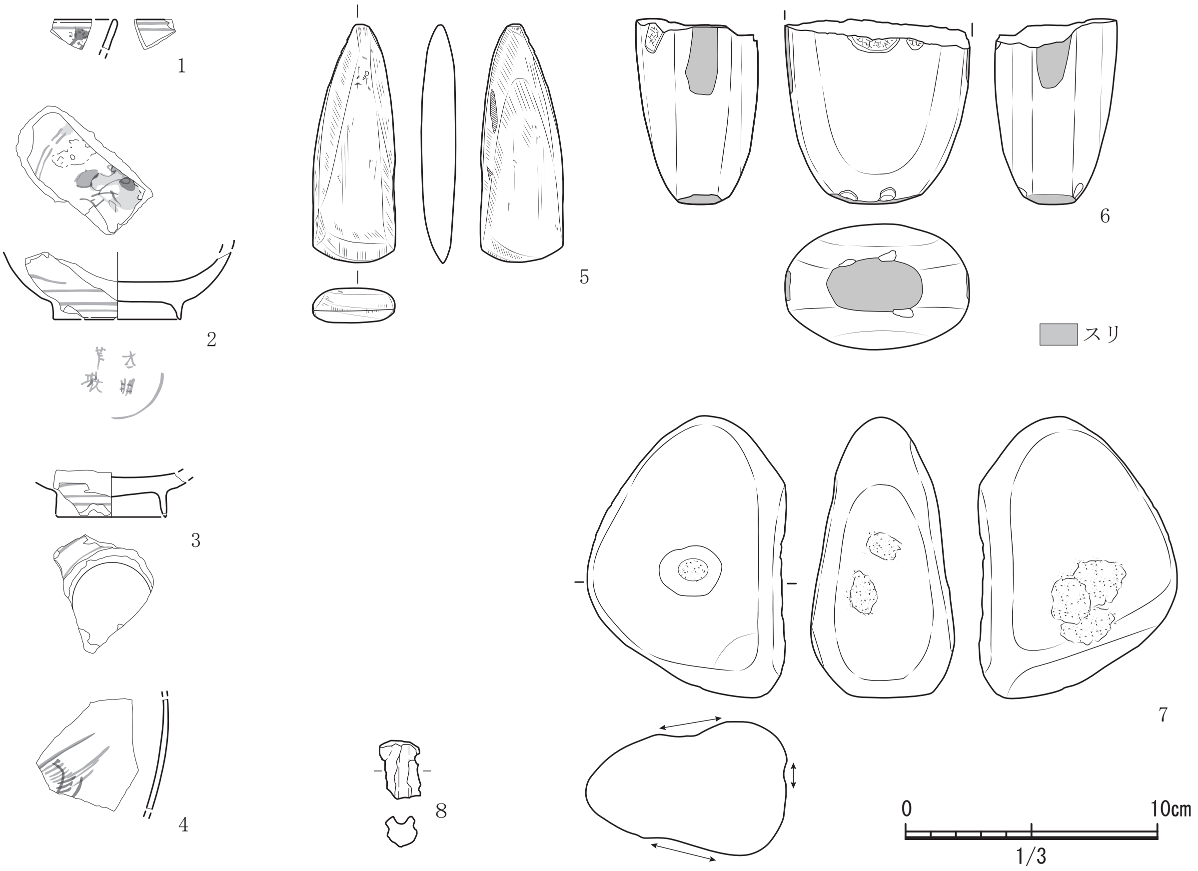


図12　遺構外出土遺物（２）

第４章　自然科学分析

第１節　郷山前村元遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社　加速器分析研究所

１　測定対象試料

郷山前村元遺跡は、青森県青森市浪岡大字郷山前字村元（北緯40°42′44″、東経140°33′04″）に所在し、梵珠山南麓の低位段丘上の緩斜面に立地する。測定対象試料は、円形周溝と性格不明遺構から出土した木炭と、井戸跡の井戸枠から採取された木片の合計３点である（表３）。試料C-1、C-2が出土した遺構は平安時代、C-3が採取された井戸跡は江戸時代以降と推定されている。

２　測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、付着物、混入物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（表１「処理前試料量」）。
(2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（表１「処理後試料量」）。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
(3) 必要量を採取、秤量（表１「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。
(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（表１「精製炭素量」）。
(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
(6) グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

表１　試料の処理状況

測定番号	試料名	処理前試料量 (mg)	処理後試料量 (mg)	燃焼量 (mg)	精製炭素量 (mg)
IAAA-231745	C-1	13.02	8.09	4.38	3.09
IAAA-231746	C-2	22.14	5.05	4.50	3.08
IAAA-231747	C-3	11.80	6.64	5.30	3.10

４　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数、^{14}Cカウント数、^{13}C/^{12}C比を表２に示す。

表２　試料のAMS測定状況

測定番号	試料名	測定回数	^{14}C Count	^{13}C/^{12}C （%）
IAAA-231745	C-1	14	166306	1.0947
IAAA-231746	C-2	14	169799	1.0959
IAAA-231747	C-3	14	189196	1.0937

５　算出方法

(1)　δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表３）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

(2)　^{14}C年代（Libby Age：yrBP、表３）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用し、δ^{13}Cによって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正されている（表３）。

(4)　暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ=68.3%）あるいは２標準偏差（２σ=95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である（表４の「暦年較正用（yrBP)」）。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正の結果を表４（１σ・２σ暦年代範囲）に示す。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用（yrBP)」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

６　測定結果

測定結果を表３、４に示す。

第５号円形周溝とSX01から出土した試料２点（C-1、C-2）の^{14}C年代は、C-1が1280±20yrBP、C-2が1260±20yrBPである。暦年較正年代（２σ）は、C-1が670～774cal ADの範囲、C-2が673～822cal ADの間に２つの範囲で示される。平安時代と推定されるのに対し、C-1は若干古く、C-2は一致する範囲を持つが、主要な範囲は若干古い結果となっている。

SE02井戸枠の試料C-3の^{14}C年代は170±20yrBP、暦年較正年代（２σ）は1662～1877cal ADの間に４つの範囲と1916cal AD以降の範囲で示される。江戸時代以降との推定に一致する結果となった。なお、この較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する（表４下の警告参照）。

今回測定された試料３点のうち、C-1、C-2は木炭で、いずれも樹皮は確認できない。木片C-3は年輪を観察できず部位など明確でないが、樹木であればこれも樹皮を確認できない。このため次に記す古木効果を考慮する必要があると見られる。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す（古木効果）。今回測定された試料はいずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できないことから、測定された年代値は、その木が死んだ年代よりも古い可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて50％を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), Radiocarbon 62(4), 725-757

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C、^{14}C年代（Libby Age）、pMC）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC（%）
IAAA-231745	C-1	第５号円形周溝　確認面	木炭	AAA	−26.72 ±0.20	1,280±20	85.26 ±0.23
IAAA-231746	C-2	SX01　１層	木炭	AAA	−25.66 ±0.16	1,260±20	85.45 ±0.23
IAAA-231747	C-3	SE02　井戸枠（W-19）	木片	AAA	−27.65 ±0.17	170±20	97.86 ±0.25

［IAA登録番号：#C373］

表４　放射性炭素年代測定結果（暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	試料名	暦年較正用（yrBP）	較正条件	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
IAAA-231745	C-1	1,281±21	OxCal v4.4 IntCal20	679calAD － 707calAD（31.8%） 728calAD － 749calAD（22.5%） 758calAD － 771calAD（14.0%）	670calAD － 774calAD（95.4%）
IAAA-231746	C-2	1,262±21	OxCal v4.4 IntCal20	684calAD － 744calAD（68.3%）	673calAD － 778calAD（86.4%） 790calAD － 822calAD（ 9.1%）
IAAA-231747	C-3	173±20	OxCal v4.4 IntCal20	1670calAD － 1684calAD（11.4%）* 1734calAD － 1779calAD（37.0%）* 1799calAD － 1804calAD（ 3.9%）* 1929calAD － ...（16.0%）*	1662calAD － 1695calAD（18.7%）* 1725calAD － 1813calAD（54.8%）* 1839calAD － 1843calAD（ 0.4%）* 1873calAD － 1877calAD（ 0.4%）* 1916calAD － ...（21.0%）*

* Warning! Date may extend out of range
　Warning! Date probably out of range
（この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の^{14}C年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。）

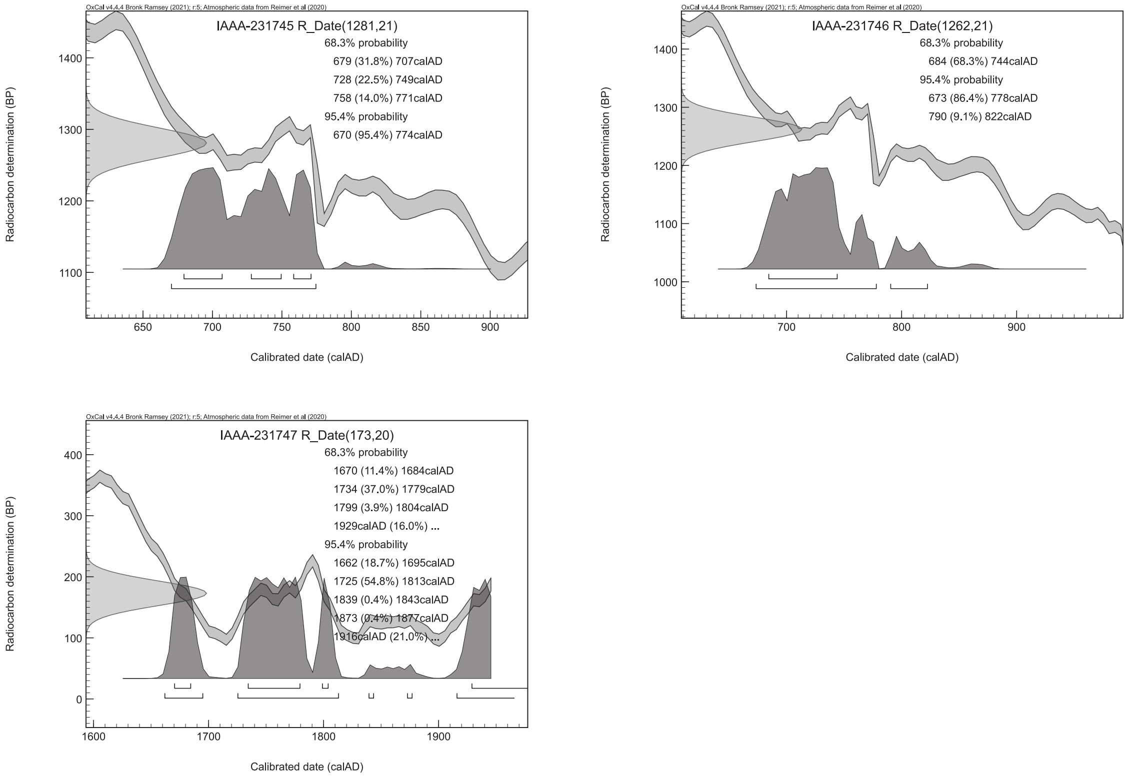


図１　暦年較正年代グラフ

第２節　木材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

１　はじめに

青森市の郷山前村元遺跡から出土した木材について樹種同定を行った。

２　試料と方法

試料は、第２号井戸跡の側板やタガなど７点である。調査所見では、遺構の時期は近世～近代と推測されている。

これらの試料から、剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察および同定し、写真撮影を行った。

３　結果

樹種同定の結果、側板はいずれも針葉樹のマツ属複維管束亜属、ダボとタガは単子葉類のタケ亜科であった。結果の一覧を表１に示す。

表１　樹種同定結果一覧

分析No.	遺構名	サンプル名	層位	樹種	木取り
1	第２号井戸跡	W-3	井戸側１段目	マツ属複維管束亜属	板目
2	第２号井戸跡	W-9	井戸側１段目	マツ属複維管束亜属	板目
3	第２号井戸跡	W-19	井戸側１段目	マツ属複維管束亜属	板目
4	第２号井戸跡	W-20	井戸側１段目	マツ属複維管束亜属	板目
5	第２号井戸跡	W-21	井戸側２段目	マツ属複維管束亜属	板目
6	第２号井戸跡	W-21付属	井戸側２段目ダボ	タケ亜科	削出
7	第２号井戸跡	－	井戸側２段目上部タガ	タケ亜科（マダケ属）	割材

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真と試料写真を図版に示す。

(1) マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　図版１　1a-1c（分析No.１）、2c（分析No.２）、3c（分析No.３）、4c（分析No.４）、5c（分析No.５）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靭性は大である。

(2) タケ亜科　Subfam. *Bambusoideae*　イネ科　図版１　6a. タケ亜科（No.６）

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一対の道管とそれと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

(3) マダケ属　*Phyllostachys*　稈　イネ科　図版１　７（分析No.７）

肉眼観察で、稈の節は２環状である。下側の輪が鋭く、上側は緩く膨出している。以上の特徴からマダケ属と判断した。

４　考察

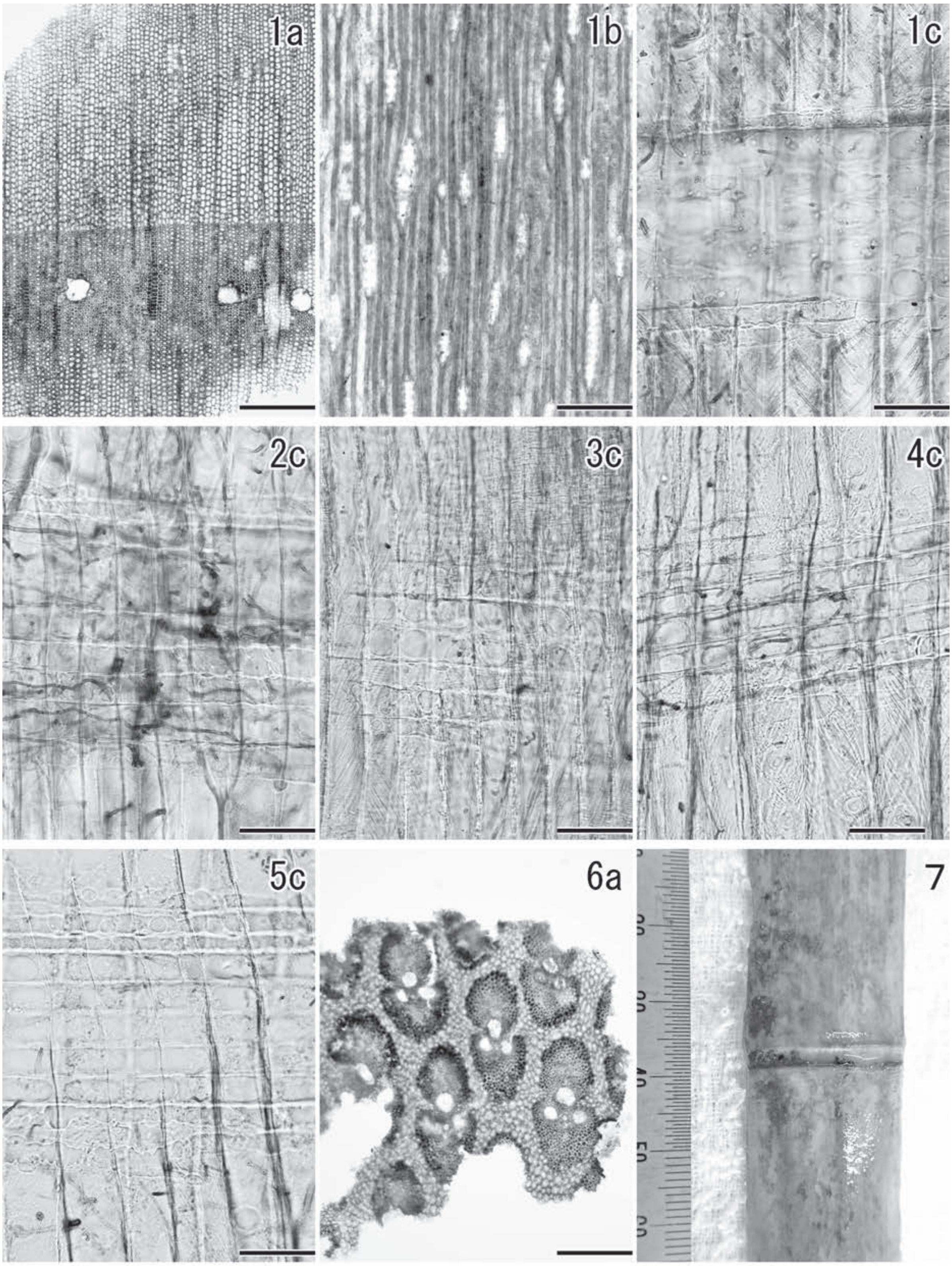
第２号井戸跡では、側板は１段目と２段目ともにマツ属複維管束亜属であった。ダボとタガはタケ亜科で、タガは節が確認できたためマダケ属と同定した。側板は、木取りはいずれも板目である。マツ属複維管束亜属の材は、芯材の保存性が高く、耐水性がある（平井，1996)。そのため井戸材としても適している。

（黒沼保子）

引用・参考文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．



図版１　木材の光学顕微鏡写真と試料写真

1a-1c．マツ属複維管束亜属（分析No.１）、2c．マツ属複維管束亜属（分析No.２）、3c．マツ属複維管束亜属（分析No.３）、4c．マツ属複維管束亜属（分析No.４）、5c．マツ属複維管束亜属（分析No.５）、6a．タケ亜科（No.６）、７．マダケ属（分析No.７）

a：横断面（スケール=500μm）、b：接線断面（スケール=200μm）、c：放射断面（スケール=50μm）

第３節　郷山前村元遺跡出土の火山灰について

弘前大学大学院理工学研究科　佐々木　実

１　はじめに

青森県青森市浪岡に所在する郷山前村元遺跡から出土した火山灰試料の分析結果を報告する。

２　試料

分析を行った試料は、表１に示す２試料である。分析番号１　、２　の試料はいずれも白頭山－苫小牧テフラの可能性が想定されている。

３　分析方法および分析結果

上記２試料の火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、量の少ないものは全量を、量の十分にあるものは約10ｇを分取し、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子から目開き250㎛のふるいを通過したものを紫外線硬化樹脂により封止してスミアスライドを作成した。これを偏光顕微鏡により観察し、火山ガラスの形態、構成鉱物の種類を記載した。分析結果を表２に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を図１に示す。

４　火山灰の帰属

分析番号１、２の試料はいずれも主としてバブル型の無色火山ガラスからなり、アルカリ長石を含み、試料２についてはエジリンオージャイトも含まれることにより、白頭山－苫小牧テフラ起源の粒子が主体であると判断される。また斜長石、普通輝石、直方輝石、および褐色ガラス粒子を含むことから、十和田aテフラの粒子も含まれると推定される。普通角閃石粒子が認められるが、これは周辺土壌から十和田八戸テフラないしそれより古いテフラ起源の鉱物粒子が混入したものと推定される。

白頭山－苫小牧テフラ（B-Tm）は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山（長白山）の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、バブル型および軽石型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む（町田・新井　2003)。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている（早川・小山　1998；Oppenheimer et al. 2017：Hakozaki et al.2018)。

十和田aテフラは、平安時代に起きた十和田カルデラの最新噴火の噴出物である。軽石型およびバブル型の無色火山ガラスのほかに、褐色を呈する気泡の少ないガラス片を含む特徴がある。鉱物は斜長石、直方輝石、普通輝石を含む（町田・新井　2003)。本テフラの噴出年代はAD915年とされている（町田ほか　1981；早川・小山　1998)。

十和田八戸テフラは、十和田カルデラのカルデラ形成期の最後の噴出物であり、降下火山灰と火砕流堆積物からなる。軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、斜長石、直方輝石、普通輝石、および普通角閃石を含む（町田・新井　2003)。本テフラの噴出年代は、15.5 cal ka BP とされている

（Horiuchi et al. 2007）。

引用文献

早川由紀夫・小山真人　1998　日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日―十和田湖と白頭山―　火山　43　403-407.

町田　洋・新井房夫　2003 『新編火山灰アトラス　－日本列島とその周辺－』 東京大学出版336p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広　1981　日本海を渡ってきたテフラ　科学　51　562-569.

Hakozaki，M.，Miyake，F.，Nakamura，T.，Kimura，K.，Masuda，K.，& Okuno，M.（2018） Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774–775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*，60，261-268.

Horiuchi，K.，Sonoda，S.，Matsuzaki，H. and Ohyama，M.（2007）Radiocarbon analysis of tree rings from a 15.5- cal kyr BP pyroclastically buried forest: a pilot study. *Radiocarbon*，49，1123-1132.

Oppenheimer，C.，L. Wacker，J. Xu，J.D. Galvan，M. Stoffel，S. Guillet，C. Corona，M. Sigl，N. Di Cosmo，I. Hajdas，B. Pan，R. Breuker，L. Schneider，J. Esper，J. Fei，J.O.S. Hammond，U. Buntgen（2017）Multiproxy dating the ‘Millennium eruption’ of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*，158，164-171.

表1　郷山前村元遺跡　火山灰サンプル

分析番号	遺構等	層位	分析に使用した重量(g)	洗浄後重量(g)
1	第１号竪穴建物跡	１層	9.8	1.0
2	第１号竪穴建物跡	１層	6.6	0.8

表2　郷山前村元遺跡　火山灰記載

分析番号	火山ガラス			鉱物								帰属
	bw	pm	br	pl	af	qz	opx	aug	ag-aug	ho	opq	
1	○	＋	＋	＋	○	－	＋	＋	－	＋	＋	B-Tm+To-a(+To-H)
2	○	＋	＋	＋	○	－	＋	＋	＋	＋	＋	B-Tm+To-a(+To-H)

○：含まれる；　＋：微量に含まれる；　－：含まれない

bw: バブル型ガラス，pm: 軽石型ガラス，br: 褐色ガラス，pl: 斜長石，af: アルカリ長石，qz: 石英，opx: 直方輝石，aug: 普通輝石，ag-aug: エジリンオージャイト，ho: 普通角閃石，opq: 不透明鉱物
B-Tm: 白頭山苫小牧テフラ，To-a: 十和田aテフラ，To-H: 十和田八戸テフラ

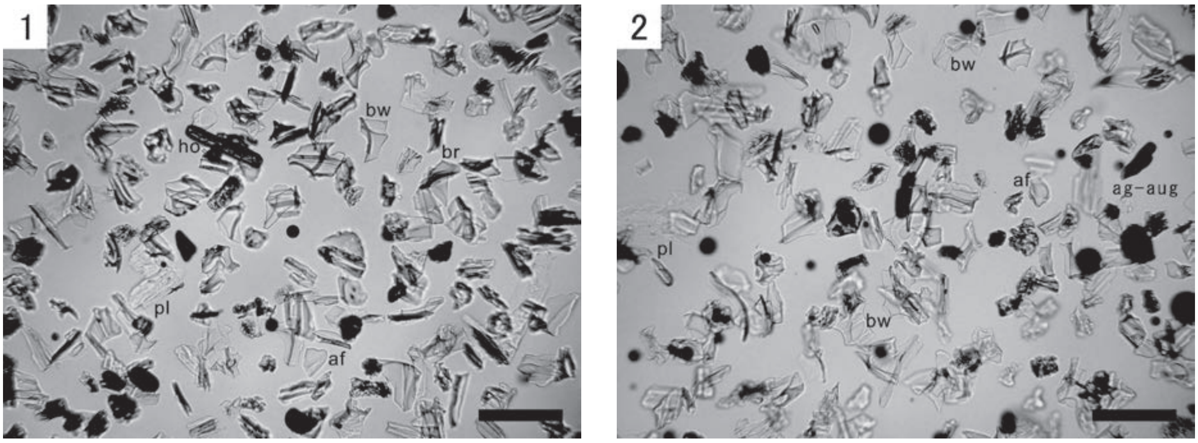


図1　火山灰試料の偏光顕微鏡写真

下方ポーラのみ（オープンニコル）。左上の番号は試料番号。
右下スケールの長さは200μm。記号は表２に同じ。

第５章　総括

第１節　平安時代の遺物について

平成28年度と今回の調査で、平安時代の遺物は土師器（坏・甕・壺)、須恵器（坏・長頸壺・甕)、土製品（羽口・焼成粘土塊)、鉄製品（刀子・苧引金・板状)、鉄滓が出土した。ほとんどは小片である。

ここでは、今回の調査で第１号性格不明遺構から出土した土師器坏（図７－１）について記述し、周辺遺跡からの刻書土器を概観する。口縁部の一部が欠損しているもののほぼ完形で、ロクロ整形で器面無調整、底部は回転糸切りで、胴部は底部から外に膨らむように内湾しながら立ち上がり、口唇部付近で外反する器形である。胎土に径５㎜程の小礫を含み、焼成は硬質である。口縁部径13.4㎝・底径6.7㎝・器高5.3㎝である。法量等の特徴から、岩井（岩井2008・2009）のⅡ若しくはⅢに相当すると考えられ、平安時代の９世紀後半～10世紀前半の年代が想定される。最大の特徴は底面に「大」と思われる文字若しくは記号のようなもの（以下、「大」字とする）刻書されていることである。刻線は幅約１㎜、深さ１㎜未満の線で構成され、断面形から半円状工具で焼成前に施文されたと判断される[1)]。施文は①横棒→②左の斜線の順になされ、横棒は右→左方向、斜線は左下→右上に向かって書かれており、筆順としては方向が逆である。なお、右の斜線は他の線と重複しないため新旧関係は不明であるが、左上→右下方向にされている。

本遺跡周辺の大釈迦丘陵南端（旧浪岡町）に所在する遺跡から出土した刻書土器について、「大」字のもの（図13）と坏の底面に刻書されたもの（図14・15）とをまとめた。

図13に示した「大」字は、土師器坏の胴部外面、須恵器坏の胴部外面・長頸壺の頸部・鉢の頸部（小壺の肩部）に施される。坏の中には逆位で施されているもの（図13-６）もあり、伏せて置かれていたと考えられるものもある。

図14・15に示した底部に刻書されるものには、線が１本のもの（図14-１～10)、２本のもの（図14-11～25：二・×)、３本のもの（図15-１～５：大・上若しくはコ・廾？・土・三)、４本のもの（図15-６～７：井・王)、５本のもの（図15-８～11：玉？)、その他のもの（図15-12～15）がある。刻書は線２本の×が多い。線３本のものは種類が多いが、これは線の配置によって変動が生じやすいためだと推測される（線の交差がない「三」:、線を交差させて線１本が突き出す「大」、など)。線５本のものは、「玉」？が野尻（４）遺跡だけで４点出土しているのが特異的である。「大」字は漢字を理解していなくても生じる意匠とも考えられ、他の刻書と同様に漢字なのか記号なのは判断できない。

このように、底部に「大」字が施文されたものは、周辺からも、また、県内でもこれまで確認されておらず[2)]、今のところ県内では類例がないことを指摘しておく。

第２節　平安時代の遺構について

平成28年度と今回の調査で、平安時代の遺構は竪穴建物跡・土坑・溝跡・円形周溝・性格不明遺構が検出された。

竪穴建物跡は１棟ではあるが、今回の調査で初めて検出された。調査区南西端に位置する。一辺約3.3m四方で隅丸方形の小型のもので、カマド・柱穴は検出されなかったが、壁溝がほぼ全周に巡る。

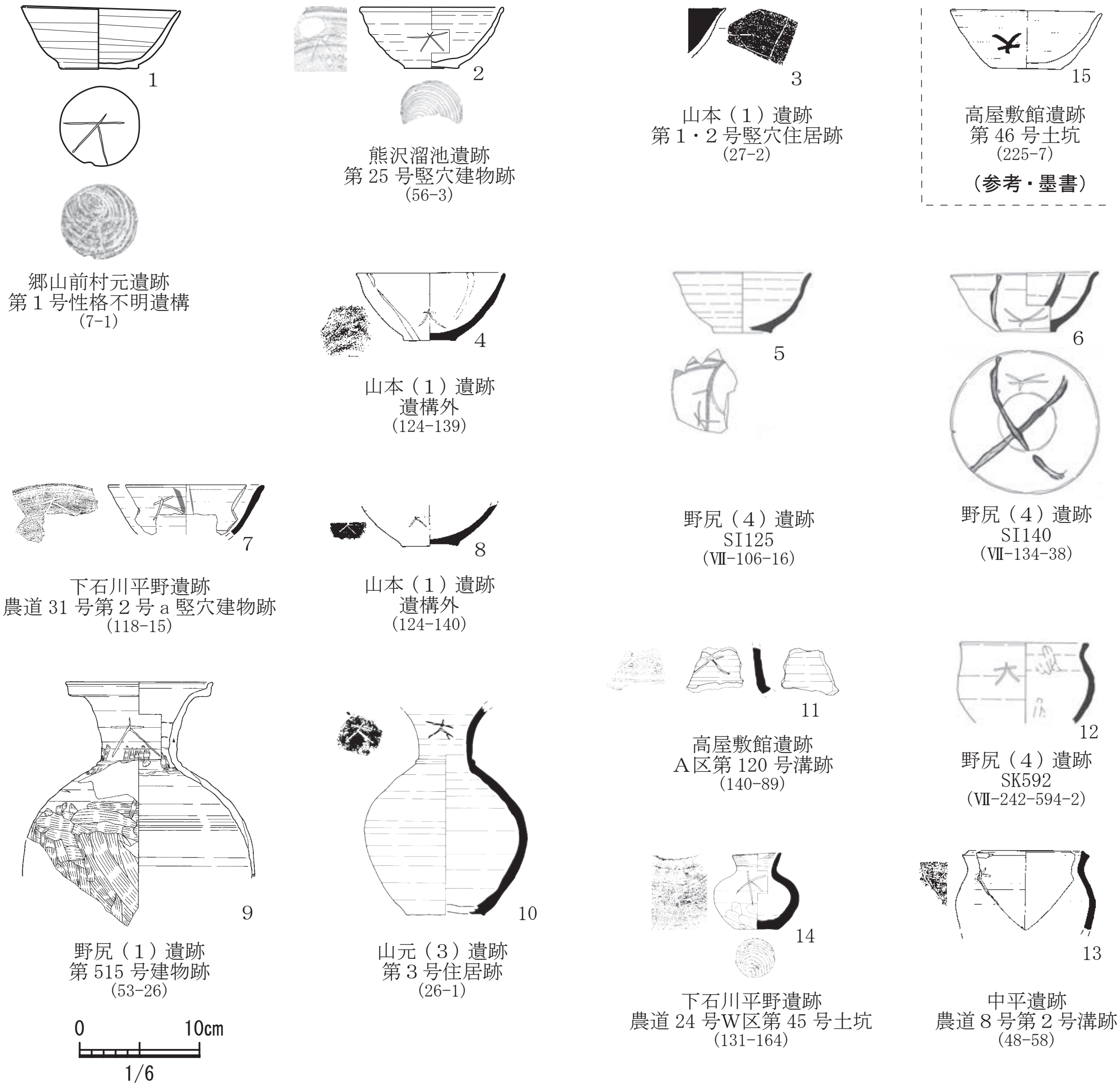


図13　郷山前村元遺跡周辺出土の「大」字刻書土器

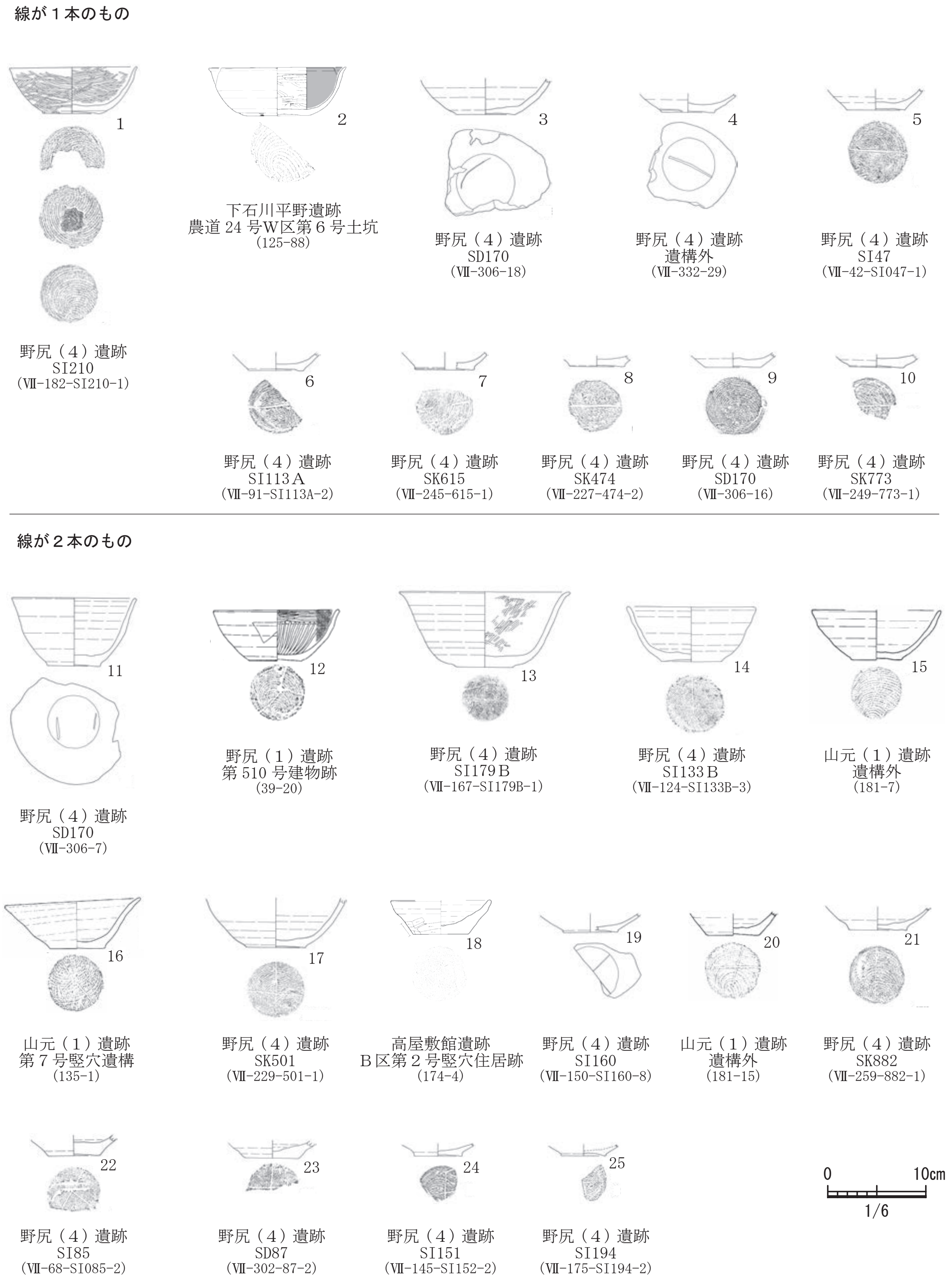


図14　郷山前村元遺跡周辺出土の坏底面刻書土器（１）

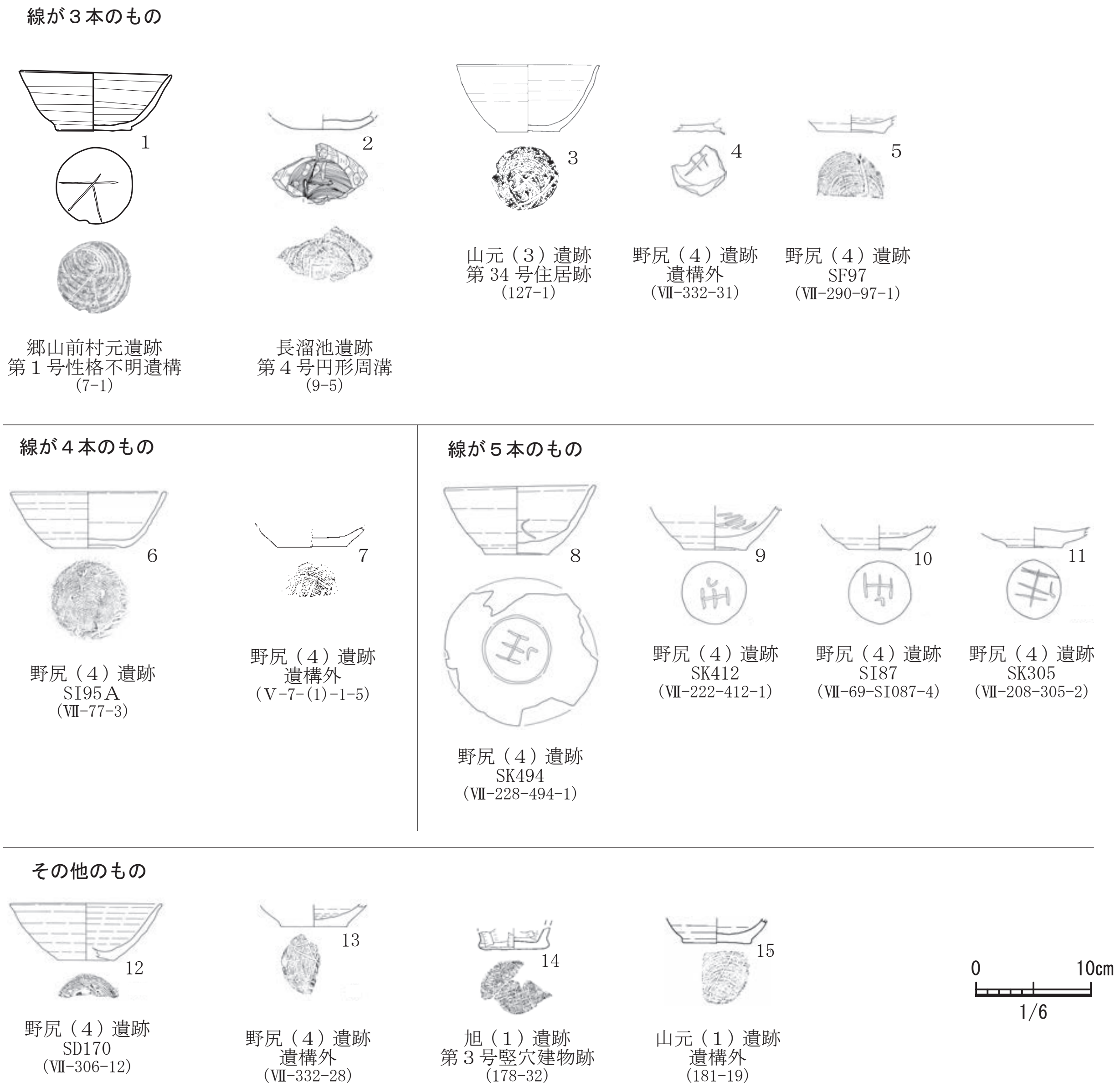


図15　郷山前村元遺跡周辺出土の坏底面刻書土器（２）

床面の全面に掘方を有し、床を貼っているが起伏がある。堆積土最上層の１層中に火山灰が多量に混入する状況が認められた。白頭山－苫小牧テフラ起源の粒子が主体である。堆積土中から土師器甕の胴部片が１点出土した。竪穴建物跡は小型であることやカマドが検出されなかったことから、生活空間としての要素が乏しいため居住空間でない可能性も考えられる。なお、竪穴建物跡は第５号円形周溝に隣接し、生活感がないことから殯の場としての可能性もあるが、類例に乏しいため断定は避けたい。白頭山－苫小牧テフラ降下以前の平安時代10世紀中葉には廃絶していたものと思われる。

円形周溝は５基検出された。ただし、平成28年度調査の第３号・４号円形周溝は重複があると考えられるので、実際は７基と思われる（図16)。平面形状は円形基調のものと隅丸方形のものとがある[3)]。溝底面には掘方を有し、埋め戻し土で底面を平坦化されたものがほとんどである。主体部や供献遺物は確認できなかった。規模により、特大（径８m以上：第３号（新))、大（径約８m：第３号（古))、中（径約５m：第１号・第４号（古)・第５号)、小（径約３m：４号（新))、不明（２号）に分類される。また、堆積土中に白頭山－苫小牧テフラを含むものがあり、その有無から、火山灰降下以前に構築・廃絶したもの（第１・２・３号（古))と、火山灰降下以後に構築・廃絶したもの（第３号(新))、時期不明のもの（第４号（古)・第４号（新)・第５号）に大別される。火山灰降下以前と考えられる第１・２・３号（古）は、第１号竪穴建物跡とほぼ同時期と推定される。平成28年度調査のものは方形基調で溝幅が広く掘り込みが深いものが多い。また、群集しており、拡張するものもある。一方、今年度調査のものは円形基調で、溝幅が狭く掘り込みが浅い。また、単独で所在することが平成28年度調査区と異なっている。調査区の東西でこのような違いが生じる原因は詳らかでない。円形周溝は大釈迦丘陵東側の遺跡で多く確認されているが、丘陵西側では少なく、また、五所川原市の遺跡では今のところ検出されていない。

土坑は平成28年度調査で２基確認した。同一地点に構築された廃棄土坑とみられる。堆積土中に白頭山－苫小牧テフラは認められなかったが、出土した須恵器長頸壺から火山灰降下前後の構築・廃絶と推定される。第１号土坑から炭化種実塊（イネ、キビ、アワ、ダイズ、アズキ、アサ、ソバ）が出土した。特にキビは有ふ果を中心におびただしい量が塊の状態であったため、容器や袋に入れられて保管されていたものが何らかの要因で炭化して土坑内に堆積したと推定される。また、イネはいわゆる炭化米の状態で、塊は種子同士が糊着しており、いわゆるご飯が容器に入った状態で炭化したと推定される。

溝跡は平成28年度調査で東西方向のものを３条確認した。北側が高く南側が低い。規模・軸方向・堆積土に類似性があり、区画若しくは排水の用途が考えられる。白頭山－苫小牧テフラ降下以後の構築・廃絶とみられる。

性格不明遺構は今回の調査で１基確認した。径約0.8mの円形で、検出面からの深さは0.15mと浅い。底面は倒木痕堆積土であり、倒木痕の凹地を利用したものと推測される。堆積土上位（検出面）から完形の土師器坏１点が正位で出土した。堆積土中の炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、７世紀後葉～９世紀前葉の年代（較正暦年代）の分析結果が得られたが、古木効果を考慮する必要がある。坏の年代は平安時代の９世紀後半～10世紀前半と思われ、白頭山－苫小牧テフラ降下以前に構築・廃絶した可能性がある。土師器坏の出土状況から、倒木痕の凹地を利用した供献や埋納施設とも推定されるが、詳細は不明である。

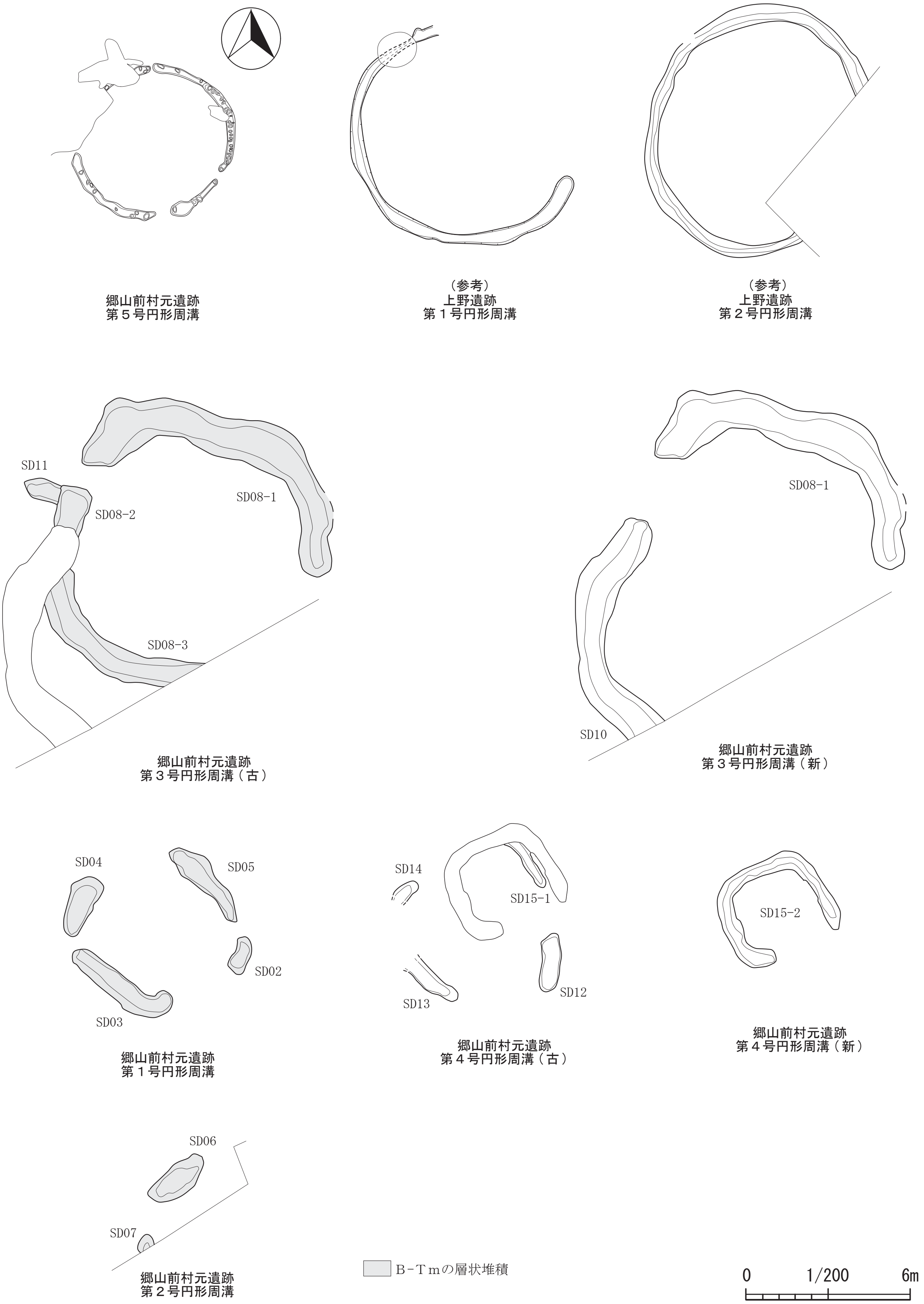

郷山前村元遺跡
第５号円形周溝
（参考）
上野遺跡
第１号円形周溝
（参考）
上野遺跡
第２号円形周溝
SD11
SD08-2
SD08-1
SD08-3
郷山前村元遺跡
第３号円形周溝（古）
SD08-1
SD10
郷山前村元遺跡
第３号円形周溝（新）
SD04
SD05
SD02
SD03
郷山前村元遺跡
第１号円形周溝
SD14
SD15-1
SD13
SD12
郷山前村元遺跡
第４号円形周溝（古）
SD15-2
郷山前村元遺跡
第４号円形周溝（新）
SD06
SD07
郷山前村元遺跡
第２号円形周溝
B－Ｔｍの層状堆積
0
1/200
6m

図16　円形周溝集成

第３節　郷山前村元遺跡の変遷について

平成28年度と令和５年度の調査によって、縄文時代・平安時代・近世以降・時期不明の遺構・遺物が確認された。各時代とも調査区内では遺構・遺物は少なく、人々が活動した痕跡に乏しい。特に第３・４号円形周溝と第１号掘立柱建物跡の間（ⅡＸ－67～ⅢJ－95グリッド）は遺構が希薄である。その理由として調査区は遺跡の北端であるだけでなく、地形の影響も考えられる。本遺跡は西に向かって下る緩斜面地であるが、その傾斜は一律ではなく、微かな谷状の凹みとして確認される沢状の地形（雨の日に沢状に水が流れる）が何本か認められる。地形図から等高線が湾曲する箇所をみると（図17)、調査区は遺跡内でも沢地形間の間隔が狭いことから、積極的な人間活動域としては選択されなかったと推定される。また、遺跡の標高という視点から考えると、調査区の標高は29～36mである。上野遺跡・熊沢溜池遺跡をはじめとする周辺の遺跡は、尾根状に高まった標高36m以上の場所に遺構が集中することから、標高の低さから土地利用が敬遠された可能性がある。なお、本遺跡で標高36m以上の箇所は、県道34号五所川原浪岡線付近の遺跡東部である。

２回の調査成果を踏まえて遺跡の各時期の変遷を概観する。

縄文時代の遺構は晩期と思われる土坑２基を確認した。形状からそれぞれ貯蔵穴・墓と考えられる。遺物は縄文土器と石器が少量出土した。縄文土器の時期は前期前葉(表館式もしくは早稲田６類)、前期後葉（円筒下層ｄ式)、後期前葉（「十腰内Ⅰ群」併行)、晩期前葉（「大洞Ｂ２式」併行）である。石器は礫石器のみ（磨製石斧・磨石・凹石）で、剥片石器は出土しなかった。遺構・遺物ともに少数で散発的な分布であり、時期によって分布域が移動している。

平安時代の遺構は竪穴建物跡・土坑・円形周溝・溝跡・性格不明遺構を確認した。竪穴建物跡・性格不明遺構は調査区西端に、円形周溝は調査区の両端に見られる。平安時代中期の白頭山－苫小牧テフラ降下以前に構築・廃絶したもの（竪穴建物跡・円形周溝３基・性格不明遺構）と降下以後のもの（円形周溝１基・土坑・溝跡）とに大別され、墓域→（火山灰降下後）→墓域・穀物等の廃棄（土坑)・区画（溝跡）と土地利用が変化したと推測される。本遺跡に隣接する上野遺跡・熊沢溜池遺跡は火山灰降下以後の集落と考えられており、本遺跡の一部はそれらに先行すると思われる。調査区西側の試掘調査では遺構が検出されなかったため、集落は遺跡東部の尾根筋にあり、その縁辺部に墓域が展開していた可能性がある。大釈迦丘陵南端の平安時代の遺跡は、丘陵西側では丘陵に開析された小谷の縁に展開し、丘陵奥部まで分布する（図１)。津軽平野に面しているものの、現状の遺跡分布からは、浪岡川・十川流域の低地利用は消極的で、丘陵上面若しくは谷底平野を利用していた可能性が考えられる。浪岡川・十川流域の平野の開発は平安時代には難しかったことは、近世になってから興った村が多いことからも推測される。

遺物は土師器・須恵器・鉄製品・土製品・鉄滓が少量出土した。鉄滓の出土から、製鉄に関連する遺構の存在も推定される。なお、熊沢溜池遺跡で炉壁・羽口が出土している。第１号性格不明遺構から出土した土師器坏は底面に「大」字を刻書するもので、他の部位に施されたものはあるが、底面への類例は今のところ県内では見られない。

近世以降の遺構は、令和５年度調査区から掘立柱建物跡１棟と柱穴が７基確認された。掘立柱建物跡は８基の柱穴で構成される梁行２間・桁行２間のほぼ東西棟の建物である。建物跡の性格は不明である。柱穴は調査区西端に５基が南北方向に並んでおり、何らかの施設になる可能性があるが詳細は

不明である。

時期不明の遺構は井戸跡２基と性格不明遺構１基が検出された。第２号井戸跡は桶を井戸枠とする「桶組井戸」である。桶組井戸の全国的な普及は15世紀以降と考えられている。桶の側板はマツ属複維管束亜属（アカマツ・クロマツ）、箍・ダボはタケ亜科であった。県内で桶組井戸の検出例はない。また、県内でマツ材を使用した桶の出土例や民俗例は、管見の限りでは見当たらなかった。全国的にもマツ材を利用する例は僅かである。津軽地域では、箍材のタケを佐渡や京都から購入していた[4)]が、この桶が県内で製作されたものであるか搬入品なのかの判断は困難である。井戸は灌漑井戸（野井戸）若しくは明治以降に普及するリンゴ栽培（農薬散布）用に利用された可能性があるが、詳細は不明である。

調査区内では時代・時期毎に利用箇所を変えており、特定の場所への集中は認められなかった。遺構の重複は土坑・円形周溝以外にないため、言い換えれば土坑・円形周溝には構築に際して規制があったと考えられる。調査区内の土地利用は、少人数でかつ短期間であったと推定される。

註

１）焼成前の記銘を「箆書」、焼成後のものを「刻書」と区別する例もあるが、本書ではそれらをまとめて「刻書」としている。

２）青森県　2008　『青森県史　資料編　古代２　出土文字資料』付録のCD-ROMにて検索。

３）隅丸方形のものを方形周溝として区分する事があるが、ここでは円形周溝としてまとめた。

４）石村真一　1997　『桶・樽Ⅲ　ものと人間の文化史　82-Ⅲ』 法政大学出版局

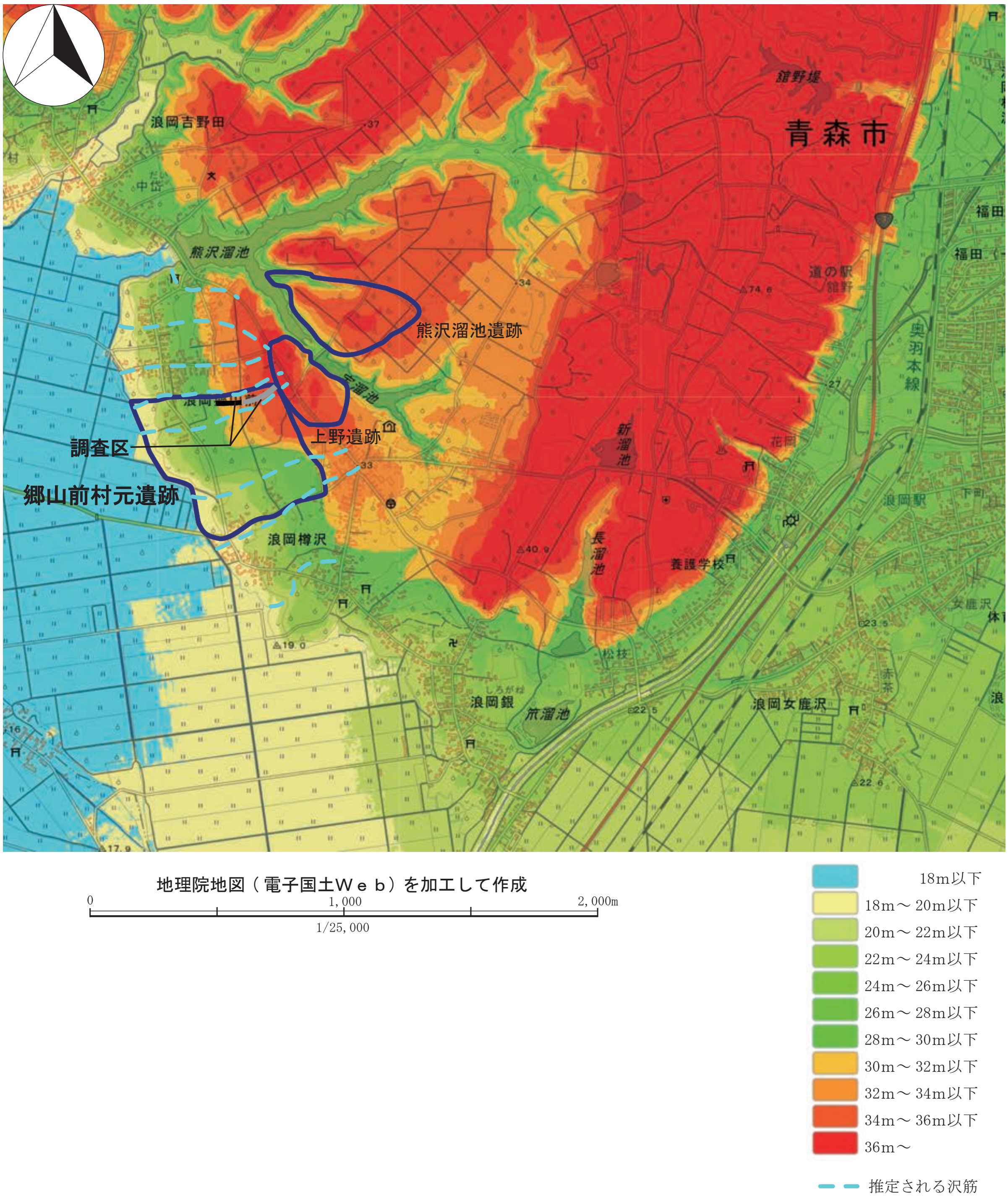


図17　郷山前村元遺跡周辺の地形

引用・参考文献

青森県　2001『青森県史　資料編　近世１』

青森県　2002『青森県史　資料編　近世２』

青森県　2006『青森県史　資料編　近世３』

青森県　2008『青森県史　資料編　古代２　出土文字資料』

青森県　2012『青森県史　資料編　中世３』

青森県　2013『青森県史　資料編　考古２　縄文後期・晩期』

青森県教育委員会　1984『下之切通り（小泊道)』青森県「歴史の道」調査報告書

青森県教育委員会　1987『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第105集

青森県教育委員会　1994『山元（３）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第159集

青森県教育委員会　1996『野尻（４）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第186集

青森県教育委員会　1998『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第243集

青森県教育委員会　2001『長溜池遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第311集

青森県教育委員会　2003『野尻（１）遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第351集

青森県教育委員会　2005『高屋敷館遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第393集

青森県教育委員会　2005『山元（１）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第395集

青森県教育委員会　2010『中平遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書　第490集

青森県教育委員会　2012『青森県遺跡詳細分布調査報告書24』青森県埋蔵文化財調査報告書　第523集

青森県教育委員会　2014『青森県遺跡詳細分布調査報告書26』青森県埋蔵文化財調査報告書　第549集

青森県教育委員会　2015『下石川平野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第556集

青森県教育委員会　2015『青森県遺跡詳細分布調査報告書27』青森県埋蔵文化財調査報告書　第560集

青森県教育委員会　2016『下石川平野遺跡Ⅱ・旭（１）遺跡・旭（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第569集

青森県教育委員会　2018『熊沢溜池遺跡・上野遺跡Ⅱ・郷山前村元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第591集

青森県教育委員会　2021『青森県遺跡詳細分布調査報告書33』青森県埋蔵文化財調査報告書　第624集

青森県教育委員会　2022『青森県遺跡詳細分布調査報告書34』青森県埋蔵文化財調査報告書　第632集

青森県教育委員会　2023『樽沢村元（３）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書　第635集

青森県教育委員会　2024『青森県遺跡詳細分布調査報告書36』青森県埋蔵文化財調査報告書　第646集

石村真一　1997『桶・樽Ⅲ　ものと人間の文化史　82-Ⅲ』法政大学出版局

岩井浩人　2008「津軽地域における古代土器食前具の変遷―９世紀から11世紀を中心に―」『青山考古』第24号

岩井浩人　2009「津軽南域における古代の土器様相」『扶桑　田村晃一先生喜寿記念論文集』青山考古学会　田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会

大橋康二　1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニュー・サイエンス社

北東北古代集落遺跡研究会　2014『９～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』九州近世陶磁学会

五所川原市教育委員会　2003『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書　第25集

小谷地肇　2023「青森県における平安時代墓制の概要」『北東北三県考古学会合同公開シンポジウム　北東北の平安時代墓制』岩手県考古学会

浪岡町　2002『浪岡町史　別巻Ⅰ』

浪岡町教育委員会　2004『野尻（４）遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　第10集

浪岡町役場　1984『浪岡町史資料編　第14集』

山内清男　1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

表２　遺構計測表

縄文時代の遺構(土坑)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	開口部規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
5	第３号土坑	SK03	ⅢF－103	不整円形	Ⅲ層	1.20	1.12	1.25	0.95	0.27	第４号土坑より古い。
5	第４号土坑	SK04	ⅢF－103	楕円形	Ⅲ層	0.94	0.57	0.80	0.49	0.41	第３号土坑より新しい。
5	第５号土坑	SK05	ⅢⅠ－106	不整円形	Ⅳ層	0.68	0.54	0.58	0.43	0.17	

平安時代の遺構(竪穴建物跡)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	(m)	
6	第１号竪穴建物跡	SI01	ⅢⅠ－107･108	隅丸方形	Ⅲ層	3.27	(3.23)	0.16	床面積:8.44㎡ 主軸:N－17.1°－W 壁溝:幅0.08～0.13m 深さ0.19～0.33m 掘方:深さ0.10m

平安時代の遺構(円形周溝)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	規模(m)		備考
						幅	深さ	
7	第５号円形周溝	SD05	ⅢH･Ⅰ－105･106	円形	Ⅲ～Ⅳ層	0.19～0.53	0.06～0.30	周溝外縁直径6.12×5.83m 内縁直径5.41×5.02m

平安時代の遺構(性格不明遺構)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	開口部規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
7	第１号性格不明遺構	SX01	ⅢH･Ⅰ－106･107	円形	倒木痕中	0.83	0.76	—	—	0.15	底部外面に「大」字が刻書された土師器坏出土。

近世以降の遺構(掘立柱建物跡)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	規模(m)		備考
						長軸	短軸	
8	第１号掘立柱建物跡	SB01	ⅢG･H－95･96	方形	Ⅲ～Ⅳ層	2.95(北辺) 2.80(南辺)	2.25(西辺) 2.29(東辺)	主軸:N－89.0°－E(北辺) N－86.0°－E(南辺)

近世以降の遺構(掘立柱建物跡を構成する柱穴)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
8	第１号掘立柱建物跡	SP02	ⅢG－96	方形	Ⅳ層	0.45	0.39	0.31	0.26	0.24	試掘トレンチ中で検出。 柱当たり0.17×0.14m
8	第１号掘立柱建物跡	SP03	ⅢG－96	円形	Ⅲ層	0.49	0.41	0.24	0.16	0.56	
8	第１号掘立柱建物跡	SP04	ⅢH－96	円形	Ⅲ層	0.47	0.44	0.26	0.16	0.45	柱当たり0.14×0.13m
8	第１号掘立柱建物跡	SP05	ⅢH－95	不整円形	Ⅲ層	0.56	0.45	0.30	0.28	0.31	
8	第１号掘立柱建物跡	SP06	ⅢG－95	円形	Ⅲ層	0.50	0.41	0.31	0.22	0.40	
8	第１号掘立柱建物跡	SP08	ⅢG－96	円形	Ⅳ層	0.45	0.38	0.28	0.22	0.31	試掘トレンチ中で検出。 柱当たり0.15×0.14m
8	第１号掘立柱建物跡	SP09	ⅢH－96	円形	Ⅲ層	0.46	0.43	0.27	0.22	0.48	
8	第１号掘立柱建物跡	SP10	ⅢG－95	方形	Ⅲ層	0.54	0.52	0.33	0.24	0.47	

近世以降の遺構(柱穴)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	開口部規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
8	第１号柱穴	SP01	ⅢE－87	円形	Ⅱ層	0.45	0.40	0.23	0.17	0.42	
8	第７号柱穴	SP07	ⅢG－95･96	円形	Ⅲ層	0.34	0.26	0.12	0.08	0.31	
8	第11号柱穴	SP11	ⅢⅠ－109	円形	Ⅲ層	0.58	0.45	0.20	0.15	0.35	
8	第12号柱穴	SP12	ⅢH－110	円形	Ⅲ層	0.41	0.40	0.26	0.20	0.37	
8	第13号柱穴	SP13	ⅢG－110	円形	Ⅲ層	0.32	0.31	0.27	0.24	0.24	
8	第14号柱穴	SP14	ⅢG－110	円形	Ⅲ層	0.50	0.42	0.32	0.23	0.21	
8	第15号柱穴	SP15	ⅢG－110	円形	Ⅲ層	0.47	0.36	0.22	0.17	0.26	

時期不明の遺構(井戸跡)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	開口部規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
9	第１号井戸跡	SE01	ⅢH－97	円形	Ⅲ層	1.66以上	—	—	—	1.37以上	堆積土上位からビニール出土。
9	第２号井戸跡	SE02	ⅢG－97･98	円形	Ⅳ層	1.17以上	—	—	—	1.82以上	試掘トレンチ中で検出。 堆積土上位からビニール出土。

時期不明の遺構(性格不明遺構)

図	遺構名	略号	位置	平面形状	検出面	開口部規模(m)		底面規模(m)		深さ	備考
						長軸	短軸	長軸	短軸	(m)	
10	第２号性格不明遺構	SX02	ⅢH－90	隅丸方形？	Ⅲ層	3.90	(0.59)	3.40	(0.32)	0.19	

表３　縄文土器観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	部位	口径 (㎝)	底径 (㎝)	器高 (㎝)	内面 特徴	外面特徴	備考
11	1	ⅢF-87	倒木痕	縄文土器	深鉢	口縁部	−	−	−		縄文か	繊維混入･器面摩滅
11	2	ⅢF-87	Ⅱ･倒木痕	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		単軸１(RL)縦位？	繊維混入
11	3	ⅢF-87 ⅢG-86	倒木痕 Ⅱ	縄文土器	深鉢	底部	−	9.0	−		単軸１(RL)縦位？	繊維混入
11	4	ⅢE-91	Ⅰ	縄文土器	深鉢	口縁部	−	−	−		側圧(Ｌ)横位 結回(LR)横位	繊維混入･ 白色骨針状物質混入
11	5	ⅢG-90	倒木痕	縄文土器	深鉢	頸部	−	−	−		結回(LR)横位？	白色骨針状物質混入･ 器面摩滅
11	6	ⅢG-90	倒木痕	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		LR横位	
11	7	ⅢG-86	Ⅱ	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		単軸１(LR)縦位？	白色骨針状物質混入･ 器面摩滅
11	8	ⅢE-91	Ⅰ	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		単軸１(LR)縦位？	白色骨針状物質混入･ 器面摩滅
11	9	ⅢE-91	Ⅰ	縄文土器	深鉢	底部	−	10.0	−		縄文か	器面摩滅
11	10	ⅢG-89	倒木痕	縄文土器	深鉢	口縁部	−	−	−		側圧(R)？	砂混入･器面摩滅
11	11	ⅢH-90	倒木痕	縄文土器	深鉢	口縁部	−	−	−		単軸１(LR)側圧？	砂混入･器面摩滅
11	12	ⅢG-90	倒木痕	縄文土器	深鉢	口縁部	−	−	−		ボタン状貼付	砂混入･器面摩滅
11	13	ⅢH-90	倒木痕	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		不明	砂粒混入･器面摩滅
11	14	ⅢI-88	Ⅰ	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−		LR横位	白色骨針状物質混入
11	15	ⅢH-87	Ⅲ	縄文土器	深鉢	底部	−	−	−	無文	無文	繊維混入
11	16	ⅢG-88	Ⅰ	縄文土器	深鉢	胴部	−	−	−	無文	無文	繊維混入･底部付近
11	17	ⅢF-91	Ⅱ	縄文土器	甕か	胴部	−	−	−		沈線	
11	18	ⅢE-96	Ⅰ･倒木痕	縄文土器	甕か	胴部	−	−	−		沈線	
11	19	ⅢG-103	倒木痕	縄文土器	台付鉢か	口縁部	−	−	−		沈線･LR横位	派頂部に刻み
11	20	ⅢG-103	倒木痕	縄文土器	台付鉢か	口縁部	−	−	−		沈線･LR横位	
11	21	ⅢF-103 ⅢG-103	Ⅱ･倒木痕 倒木痕	縄文土器	台付鉢か	胴部	−	−	−		沈線･LR横位	
11	22	ⅢF-103 ⅢG-103	倒木痕	縄文土器	台付鉢	胴～脚部	−	10.4	−		胴部:LR横位？ 脚部:無紋	
11	23	ⅢF-103	倒木痕	縄文土器	鉢か	口縁部	−	−	−		沈線(三叉状？)	口唇刺突
11	24	ⅢE-103	Ⅰ･倒木痕	縄文土器	鉢か	口縁部	−	−	−		沈線	
11	25	ⅢF-103	倒木痕	縄文土器	鉢か	胴部	−	−	−		R横位？	

表４　土師器観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	部位	口径 (㎝)	底径 (㎝)	器高 (㎝)	内面特徴	外面特徴	備考
6	1	SI01	２層･P-1	土師器	甕	胴部	−	−	−	ナデ	ケズリ	
7	1	SX01	１層･P-1	土師器	坏	完形	13.4	6.7	5.3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り･刻書「大」
11	26	ⅢF-87	Ⅰ	土師器	坏	底部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	回転糸切りか
11	27	ⅢE-96	倒木痕	土師器	甕	肩部	−	−	−	ナデ	ケズリ	
11	28	ⅢF-87	Ⅰ	土師器	甕	胴部	−	−	−	ナデ	ナデ	
11	29	ⅢG-86	Ⅱ	土師器	甕	胴部	−	−	−	ナデか	ナデか	被熱により白色化
11	30	ⅢH-87	撹乱	土師器	甕	胴部	−	−	−	ナデ	ケズリ	
11	31	ⅢG-103	撹乱	土師器	甕	胴部	−	−	−	ナデか	ナデか	
11	32	ⅢE-103	倒木痕	土師器	壺･鉢	胴部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	

表５　須恵器観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
11	33	ⅢH-89	倒木痕	須恵器	坏	胴部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	
11	34	ⅢG-105	Ⅱ	須恵器	壺	肩部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	自然釉
11	35	表採		須恵器	壺	肩部	−	−	−	ロクロ	ロクロ	鉢か
11	36	試掘トレンチ (ⅢG-94)		須恵器	甕	肩部	−	−	−	当て具	タタキ	酸化炎焼成
11	37	試掘トレンチ (ⅢF-104)		須恵器	甕	肩部	−	−	−	当て具	タタキ	
11	38	表採		須恵器	甕	胴部	−	−	−	当て具	タタキ	

表６　磁器観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	内面特徴	外面特徴	備考
12	1	表採		磁器	碗	口縁部	−	−	−	圏線	圏線･線描か	肥前Ⅳ期
12	2	ⅢH-94	Ⅰ	磁器	碗	底部	−	5.2	−	圏線･松か	圏線･線描	肥前Ⅳ期･外底面に 「太明年製」
12	3	ⅢF-89	Ⅰ	磁器	碗	底部	−	4.4	−	−	圏線	肥前Ⅳ期
12	4	ⅢF-89	Ⅰ	磁器	徳利	胴部	−	−	−	ロクロ	松葉か	肥前Ⅳ期

表７　石器観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材	重量 (g)	外面特徴
12	5	ⅢH-88	Ⅱ層下部	礫石器	磨製石斧	9.5	3.3	1.4	流紋岩	71.4	敲打→研磨
12	6		Ⅰ	礫石器	磨石	(7.4)	7.4	5.0	流紋岩	387.5	端部･側面スリ
12	7	ⅢH-87	Ⅲ	礫石器	凹石	11.3	8.5	5.8	デイサイト	467.0	表裏面･側面凹

表８　土製品観察表

図	番号	出土位置	層位 取上番号	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	内面特徴	外面特徴	備考
12	8	ⅢG-88	Ⅰ	土製品	焼成粘土塊	2.3	1.6	1.1	1.6		スサ痕か	炉壁か

調査区全景
（平成28年度調査区、上野遺跡調査区との合成・白枠内が郷山前村元遺跡調査区）

写真１　調査区全景

遺跡遠景（東→）

遺跡遠景（西→）

写真２　遺跡遠景

遺跡近景（北東→）

第１号竪穴建物跡　精査状況（南西→）

第５号円形周溝　検出状況（北→）

第１号掘立柱建物跡　精査状況（北→）

第２号井戸跡　精査状況（南→）

写真３　遺跡近景・調査状況

基本層序A－A’（北→）

基本層序B－B’（南→）

写真４　基本層序

第３・４号土坑　土層（南→）

第３・４号土坑　完掘（南→）

第５号土坑　土層（南→）

第５号土坑　完掘（南→）

第１号竪穴建物跡　検出状況（西→）

第１号竪穴建物跡　遺物出土状況（南東→）

第１号穴建物跡　掘方完掘（東→）

第１号竪穴建物跡　土層Ｃ－Ｃ’（東→）

写真５　縄文時代の遺構（土坑）・平安時代の遺構（竪穴建物跡（１））

第１号竪穴建物跡　完掘（西→）

第１号竪穴建物跡　土層A－A’（南→）

第１号竪穴建物跡　土層B－B’（東→）

写真６　平安時代の遺構（竪穴建物跡（２））

第５号円形周溝　完掘（東→）

第５号円形周溝　土層A（南→）

第５号円形周溝　土層A'（南→）

第５号円形周溝　土層B-B'（東→）

第５号円形周溝　掘方の工具痕（南東→）

写真７　平安時代の遺構（円形周溝）

第１号性格不明遺構　平面検出（東→）

第１号性格不明遺構　土層（東→）

第１号性格不明遺構　坏出土状況（西→）

第１号性格不明遺構　坏出土状況（東→）

写真８　平安時代の遺構（性格不明遺構）

第１号掘立柱建物跡　完掘（北→）

SP02　土層（南→）

SP04　土層（南→）

SP08　土層（南→）

SP10　土層（南→）

写真９　近世以降の遺構（掘立柱建物跡）

第１号井戸跡　土層（南→）

第１号井戸跡　精査終了状況（南→）

第２号井戸跡　検出（南西→）

第２号井戸跡　作業状況（南東→）

第２号井戸跡　土層（南→）

第２号井戸跡　井戸枠検出（南→）

第２号井戸跡　井戸枠内土層（南→）

第２号井戸跡　井戸枠（１段目）外面（南→）

写真10　時期不明の遺構（井戸跡（１））

第２号井戸跡　井戸枠（１段目）箍（南→）

第２号井戸跡　井戸枠（１・２段目）検出（南→）

第２号井戸跡　井戸枠（２段目）検出（南→）

第２号井戸跡　井戸枠（２段目）内完掘（南→）

第２号井戸跡　井戸枠（２段目）箍・ダボ（東→）

第２号井戸跡　井戸枠（１段目）部材

第２号性格不明遺構　土層（北→）

第２号性格不明遺構　完掘（北西→）

写真11　時期不明の遺構（井戸跡（２）・性格不明遺構）

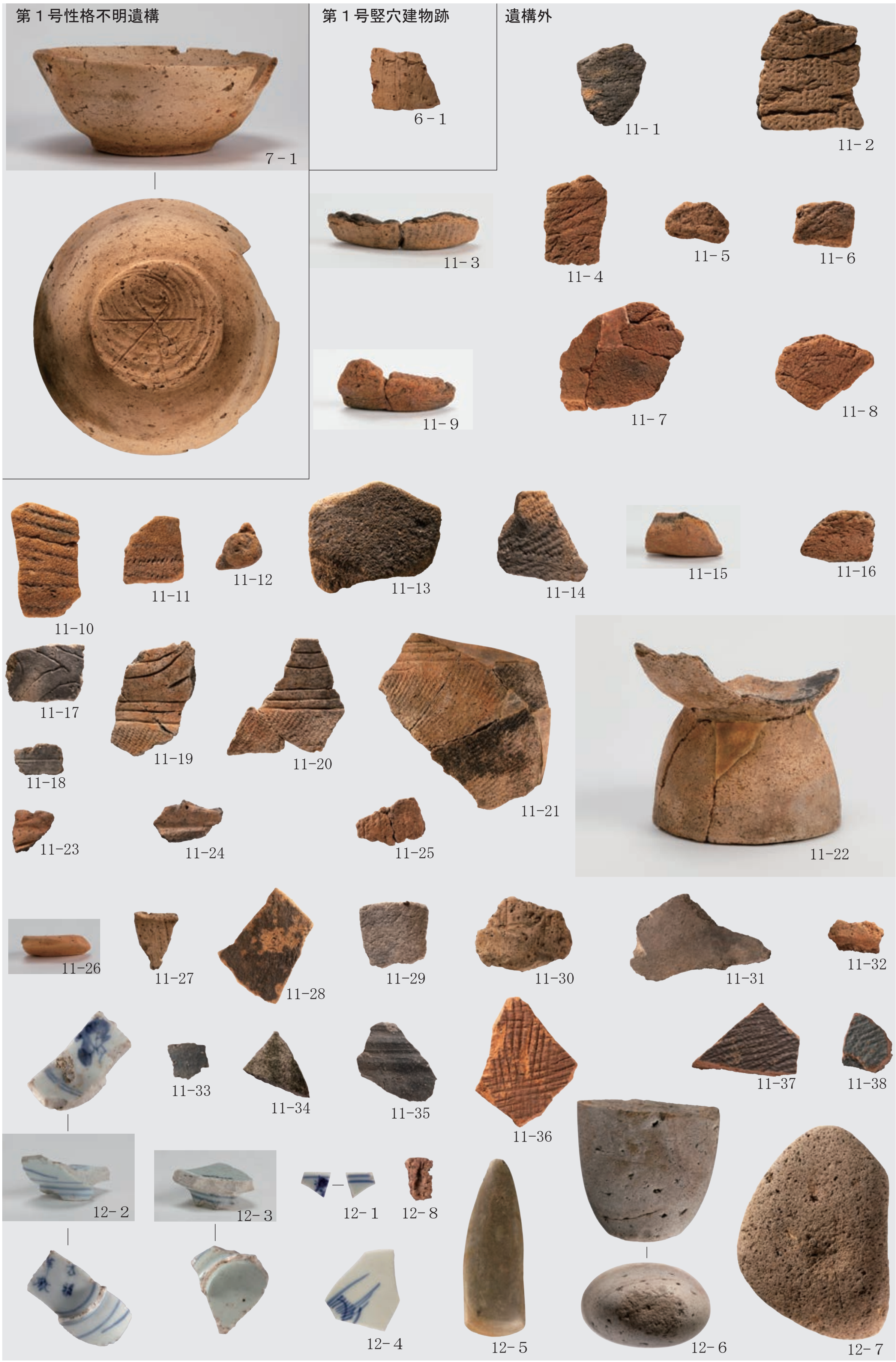

第１号性格不明遺構
第１号竪穴建物跡
遺構外
7－1
6－1
11－1
11－2
11－3
11－4
11－5
11－6
11－7
11－8
11－9
11－10
11－11
11－12
11－13
11－14
11－15
11－16
11－17
11－18
11－19
11－20
11－21
11－22
11－23
11－24
11－25
11－26
11－27
11－28
11－29
11－30
11－31
11－32
11－33
11－34
11－35
11－36
11－37
11－38
12－1
12－2
12－3
12－4
12－5
12－6
12－7
12－8

写真12　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ごうさんまえむらもといせきに
書 名	郷山前村元遺跡Ⅱ
副 書 名	常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第649集
編 著 者 名	平山　明寿
編 集 機 関	青森県埋蔵文化財調査センター
所 在 地	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15　TEL 017-788-5701
発 行 機 関	青森県教育委員会
発 行 年 月 日	2025年３月12日

ふ り が な 所 収 遺 跡 名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系（JGD 2011）		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 経			
郷山前村元遺跡（ごうさんまえむらもといせき）	青森県（あおもりけん） 青森市（あおもりし） 浪岡大字（なみおかおおあざ） 郷山前字（ごうさんまえあざ） 村元地内（むらもとちない）	02201	201398	40° 42′ 44″	140° 33′ 04″	20230509 ～ 20230728	1,670	記録保存 調査

所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
郷山前村元遺跡	散布地	縄文時代	土坑	3	縄文土器・石器	
	集落跡	平安時代	竪穴建物跡 円形周溝 性格不明遺構	1 1 1	土師器・須恵器・土製品	土師器坏の底面に刻書
	散布地	近世以降	掘立柱建物跡 柱穴	1 7	陶器・磁器	
		時期不明	井戸跡 性格不明遺構	2 1		

要 約	郷山前村元遺跡は、青森市役所浪岡庁舎から西へ約３㎞、梵珠山南麓に広がる標高約30ｍの丘陵上に位置する。調査区付近は西へ下る緩斜面で、眼前に津軽平野と岩木山を望む。平成28年度に当センターが発掘調査を行っており、縄文時代の遺物と、平安時代の円形周溝・溝跡・土坑を検出した。 　今回は前回調査区の西側に接する部分を調査し、縄文時代の土坑と平安時代の竪穴建物跡・円形周溝・性格不明遺構、近世以降の掘立柱建物跡・柱穴、時期不明の井戸跡・性格不明遺構を検出した。また、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・土製品、近世以降の磁器・陶器などが出土した。 　今回の調査から、郷山前村元遺跡は、東側に隣接する上野遺跡から西側の津軽平野に向かって広がる緩斜面地が、縄文時代・平安時代・江戸時代以降と断続的に利用されていたことが判明した。遺構や遺物の内容から、調査区周辺は各時代とも積極的に人々が活動した痕跡に乏しく、集落の縁辺部にあたると推定される。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第649集

郷山前村元遺跡Ⅱ

－常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日	2025年３月12日
発　　行	青森県教育委員会
編　　集	青森県埋蔵文化財調査センター
	〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
	TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702
印　　刷	川口印刷工業株式会社青森営業所
	〒030-0812 青森県青森市堤町２丁目１－７
	堤町ファーストスクエアビル6F-C
	TEL 017-721-6520　FAX 017-775-3510

この印刷物は300部作成し、印刷経費は１部あたり1,980円（うち県負担1,089円）です。